白南風

北原白秋

青空文庫

目次

序 3

天王寺墓畔吟 4

緑ケ丘新唱 21

世田ヶ谷風塵抄 37

砧村雑唱 51

巻末記 93

序

白南風は送梅の風なり。白光にして雲霧昂騰し、時によりて些か小雨を雜ゆ。欝すれども而も既に輝き、陰濕漸くに霽れて、愈※に孟夏の青空を望む。その薫蒸するところ暑く、その蕩搖するところ、日に新にして流る。かの白榮と言ひ、白映と作すところのもの是也。蓋し又、此の白映の候に中りて、茲に我が歌興の煙霞と籠るところ多きを以て、採つて題名とす。もとより本集の歌品秋冬に尠く、春夏に多きもその故なり。

我が短歌に念持するところのもの、即ち古來の定型にして、他奇なし。ただ僅かに我が歌調を這個の中に築かむとするのみ。その自然の觀照に於ては、必ずしも名山大澤に之を索めず、居に從ひて選ぶ平々凡々の四圍に過ぎず。又、その生活感情の本とするところに於て、あながちに一時の世相に關せず、社會機構とも強ひて連工する無し。而も又、孤高を潔しとし、流行を斥くるにもあらず。ただ專ら短歌を短歌とし、自然を自然とし、我を亦我とするのみ。本分は我自ら知るべきなり。

惟ふに風騒いやしくもすべからず。かの光明に參じ、虚實交※にして莊嚴の祕密を識る、畢竟は此の我を觀、我を識るなり。一なる生命の根源に貫徹すべきのみ。乃ち、心地清明にして萬象おのづからに透映し、品格整齊して氣韻おのづからに生動せむ。純情にして簡朴なる、幽玄にして富贍なる、情意臻つて詞華之に順じ、境涯極に入つて象徴の香氣一に鐘る。一首は遂に一首にして亦生死の道なり。質實にして強靱ならされば得べからず。

又、惟ふに、神工にして成るものは稀なり。我が如きは、ただに玄微に玄微を捜ね、一音に一音を積み、而も鈍根にして未だ全く達するところを知らず。ただ好むところに殉じ、時に隨ひて行ふのみ。苦樂もと一なり。靈感は安易にして俟つべきにあらず。ただ日常にありて忘れざるべきを思ふ。精錬の道にして、初めて成就すべき業ならむか。恭謙ならざれば到り難し。

『白南風』一卷、もとより屑々の歌集にして、何らの氣に負ふべきものなし。日光・月色・風塵・草卉・魚・鳥の諸相、季節と生活、單にただ一々の歌品を以て、偶ま同好にして渾厚の士の清鑒に供へむとするのみ。言説すべきにあらず。

昭和九年四月
砧村の雲と鐵塔の下にて
白秋識

口繪　中垣（世田ヶ谷時代）　山本鼎
裝幀　北原白秋

大正十五年の、谷中天王寺墓畔に於ける生活に由る。新舊作合せて、短歌二百五拾貳首、長歌一篇。墓畔吟なれども必ずしも哀傷せず、世は樂しければなり。

※・朴はひらく

天王寺墓畔吟

新居

移り來てまだ住みつかず白藤のこの垂り房もみじかかりけり

厨戸(くりやど)のとのもの小米花(こごめた)闌けにけり衣干(ころも)したり子らがさごろも

春晝

春まひる眞正面(まとも)の塔の照りしらむ廻縁(ゆか)高うしてしづかなる土

塔(あらゐ)や五重の端反(はぞり)うつくしき春晝(しゆんちう)にしてうかぶ白雲

珠數工

音きざむ珠數屋が※の板びさし椎の古葉(ふるは)のつみて久しき

春まひる隣に聽きてひそけさよ珠數みがく子らが息吹(いぶき)ためつつ

木蘭(もくれん)は花の立枝(たちえ)の影濃くて表(おもて)にほへりいちじろき照り

木蘭(もくれん)の花立ちひらく春日すらひめもすや人の珠(たま)磨きする

さしなみの隣につづる珠の緒の現(うつつ)なりけに春はかそけさ

墓地前

春過ぎて夏來にけりとおもほゆる大藤棚(おほふぢだな)のながき藤浪

墓地前は石屋が軒をうづみてし白雲木(はくうんぼく)の花もをはりぬ

鷺・鶴・珠鷄

動物園所見

鷺

白鷺はくちばし黝(くろ)しうつぶくとうしろしみみにそよぐ冠毛(かむりげ)

槇(まき)もやや光る葉がひを秀(ほ)に佇(た)ちて青鷺の群のなにかけうとさ

鶴

鶴の巣と松の根方に敷く藁は今朝(け)さやさやし新(あら)の麥稈(むぎから)

松の花あかる日竝(ひなみ)を巣に群れて丹頂の雛は早やあらはなり

珠鷄

脊に負ひて霰小紋の兩つばさほろほろ鳥は聲ふくむ鶏

珠鶏は頬の瘤赤し片寄りにみな横向くとただほろほろに

ほろほろと啼く珠鶏のこゑきけば夕日ごもりになりにたらしも

夕かげの砂掻きあますくみごゑほろほろ鳥の連れうごき來る

門庭

前廂ふかきこの家を門庭は日の照りあかり若葉かへるで

石のつま濕らふ見れば藍微塵檀の花のちりて時あり

内庭

若葉して日射明れどこの空や朝より煤のきらひふりつつ

根府川石やいまは日ざしも夏まけて板屋かへでの若葉映ろふ

石の面にむらがる羽蟻音立てて香は時經ちし春蘭の花

庭石にささとむらがるひとときは柔き羽蟻もいきほひにけり

うちあがり羽蟻かがよふ若葉木の暮合の空をいつくしみをる

門前

靄ごめに萠えてうづまくむらわかば墓地の空こそ照りあかりたれ

日はすでに照りかがやかし若葉木や東に塔のつまぞ反りたる

墓地の扇骨木

瑞若葉紅の扇骨木は日の照りを躑躅まじらひ花かとも見ゆ

角吹きてうつら添ひ來る荷かつぎの夕ごゑながし扇骨木生垣

父母と

父と母夕安らけく附かすなり扇骨木もえたつ墓地の霞を

佛にはかかる和をと宣らせこそなどか愛しき光る若葉

若葉陰しみみにまとふ蟆子の羽の眼にかゆきからわれは掻くなり

椎はもえ樟(くす)は闌(た)けゆく若葉森この日移りのしづかなれこそ

石のべの躑躅(しゞ)の蕊は長けれど萎(な)えつつ垂りぬ日の光沁み

桐の花曇

義の叔母村上氏、齢七十にも垂んとして、何故にか我が叔父と離別して、今は流浪の身を、この同じ谷中のさる寺に養ふやに傳ふ。ほのかの便なれば、その寺の名すら知るに由なし。幼少の恩愛忘れがたく、暇ある毎にたづねありく。乃ちその歌。

寺おほき山はこの空寺ごとに桐の花咲きて匂ふこの空

花ふかむ桐の木群(こむら)のとのぐもりこもれる君が空もわかなく

山川とをさなかりける我さへやまさしく老いぬ人は知らずも

とのぐもり紫こもる桐のはな暮合(くれあひ)の空にけふもなりぬる

童と花

朝早やも咲きぬ咲きぬと掻きためて子がかかへ來る花筒の花

童(たわらは)よこは朝かげの花ならず夕かげに葬(はふ)りみ墓べの花

いづれよし花は清(すが)しよ朝花と咲きも咲かずも露しげき花

新墓

朝なさな求(と)めてつつしむ墓の原に新埴土(あらはにつち)のいろのつゆけさ

あさみどり若葉映らふこの墓や埴(はに)のぬめりの何ぞつやめく

我は誰ぞ※(つゑ)は曳きつつ新墓(あらはか)の日に殖(ふ)ゆるすら朝眼樂しむ

新土(あらつち)に草の香ながれ風疾(はや)し何思ふ我のうつくしみ佇(た)つ

朝東風に

朝東風の吹きひるがへす朴の葉は葉おもてひろくすがしかりけり

吹きはらふ風さき清にこの朝や靄は霽れゆきて天王寺の塔

この道や朝は葉づたふ木しづくのしづけかりけり石にひびきて

若葉洩る朝の光は父われの麥稈帽に沁みて子が手に

子を連れて墓地は若葉の日のひかりしみじみと思ふすこやけき息

空しかり死にし幽けき爲すなかり我は世に生きて繁に喜ぶ

吹きちらふ物みな涼し朝東風や石塔うへの藍微塵の花

石のべは三角柏の葉ごもりに蚊の聲ほそし立ちてゐにけり

よく遇ふ人

犬牽くと墓地をとめぐる朝涼は力張るらし草分きにけり

草間來て荒く息づく面がまへブルドツグ勢り手綱張り引く

青春

若葉どき雲形定規かきいだき學生は行く燃ゆるその眼眸

若葉森早や鳴き勢ふ春蝉の若やぐ子らは思なけむか

朴はひらく

朴の花白くむらがる夜明がたひむがしの空に雷はとどろく

ひむがしに群れてかがよふしろき花朴の喬木ぞ木立してけれ

生けらくは生くるにしかず朴の木も木高く群れて花ひらくなり

現身は生きて朝間ぞすずしけれ愚かなりけり死にてむなしさ

光發しその清しさはかぎりなし朴は木高く白き花群

鳥聲

鳩鳶雀うぐひす矮※の鷄この朝聽けばいろいろの鳥

朝霧にほろこほろこと啼くこゑはここの御寺の鳩にかもなも

※・月光佇立

梅雨前と

日に黝む紅の扇骨木は梅雨前と刈りそめにけり朝涼夕涼

朴の花落つ

何の木か秀枝しづもる夜目にしてしろくはさらと落つるその花

短夜はいまだ暗きに小嵐や朴の木の梢を揺りぬまさしく

下葉うちたたと石うつ清し花朴の木の花の一夜落ちつつ

墓石に朴の散花日を經れば縁朽ちにけり一瓣一瓣

直土に饐えつつ黄ばむ朴の花晝は仔犬が掻きてゐにけり

石の邊は朴の散花數ふえて梅雨の日癖の雨期に入りにし

樫の花季

墓原は小雨しめやぐ夜に嗅ぎて吾が堪へがてぬ大葉樫の花

花樫の香に立つきけばけんぽなし若葉ふきあかる山戀ひにけり

姥目樫かをす雨夜はつれなくてかしこかりけり墓地を拔けをり

香にはずむ樫の木ぐれは夜ごもりに苦木の花もふけにつらむか

花季は樫の木ぐれを行きありく餓鬼もこそをれ眞夜ふけにけり

椎かしはむせぶここらの雨夜月卵塔はわびし照りもかへさず

動物園近し

樫いとどにほふ眞闇となりにけり夜ふけくるひたつ鳥獣のこゑ

淺宵

聲呼ばふ墓地のかかりの夕餉どき遊びあかねば子らは愛しも

晝のごと青葉かがよふ燈のおもて墓地のはひりもここだすずしさ

陸橋に灯の點く見れば夜靄立ち鶯谷の春も去ぬめり

電柱の影うちかしぐ夕月夜切通し上のあらくさのはな

塔の端月明らけしひらら飛ぶ二つ蝙蝠が金の羽の裏

月夜の墓畔

墓地前の花屋が花の中明るみづみづし燈の月の夜に見ゆ

月夜風しろう幅だつ墓地わきを影はずみ來る母と子らはも

椎若葉けむる月夜のうつつにも燈とぼす※か珠數かがりつつ

隈だちて家廂ふかき月の夜もおもての墓地は照りまさりつつ

探海燈夜空薙ぎゆく墓地の森や女のこゑも月に立ち來る

深夜の墓地

うしみつと夜のふけゆけば草木みな寢にしづむらしまして墓原

月よあはれ立ち蔽ふ雲のいやはてを螢火のごとも光りけるかなや

我のみや命ありと思ふ人なべて常久に生くるものにあらなくに

わづかのみ明る木膚のさるすべり夜は深うして笑ひけらしも

黒南風の雲斷れにけりこの夜ふけ月ほそく光り鷺と鶴のこゑ

梧桐の花落つ

眞夜中といよよしづもる夜の空の梧桐のはなちりそめにけり

纖くのみ月の見え來る短夜をまだ最中なり落ちしきるもの

朴と弦月

吾が觀るは幽世ならず朴の葉に月出で方の黄の火立なり

ほそき月夜ふけて光るひむがしは雲黒くしてあらはえの風

畫貌

草いきれあつき日なかに汗は滴り無縁の墓のうつら畫貌

日ざかりは未だし現しきもののつやほの肉色の畫貌のはな

そよろと風過ぎしとき日中の畫貌の花ぞ内ら見せたる

或る眞畫

石だたみ墓地の十字路の日の闌けに音とめにけり落つる榎の實

大佛

うしろ肩大き佛ぞいましける月の光のながれたるかも

暮れにけり露佛の螺髪くろぐろと月あかりしてうづだかき肩

月光人のごとし

墓原の木立の奥所夜はふかし月の光のたたずみにけり

物の風か氣に立ち來らし木の間洩る月の光のわななきにけり

白秋の墓

我と同じ名の白秋といふ人の墓あり。若目田氏たり。明治十九年沒、勤王の志士なり。容貌性格我によく似たるものあるが如し。その孀人菊池氏、吾が妻はまた菊子なり。因縁淺からず、ひとごとならず思へば、時をりに行きては墓を清め、花などをささげて、我と亦自ら慰む。

墓の座に鐵砲百合の粉は觸れて日の照はげし我はぬかづく

命かよふ我かとも思ふ朝じめりこの墓庭の青苔のいろ

青苔に染みうつくしき斑照りこの木洩れ日は幾時あらむ

この墓に日ざししづけくなりにけりきのふも來り永く居りにき

日のうち

蒸しつつも現(うつつ)ならぬかこの墓地の日ざかりを靄の立ちてあはれさ

日のうちはなにかつやめく物のこゑ墓原ごもりひびきゐるなり

蝶影

墓原や晝の霞の中あがる紋白蝶(もんしろ)の翅のちらと輝りたる

眼はあげて吾が附く道のけどほさよ白南風(しらはえ)の空をひとつ飛ぶ蝶

双蝶

氣(け)にふかき蝶のむつみや誰知らぬ墓うらの照りのすでに久しさ

紙のごとひらひらとこそありにけれ蝶の双(ふた)つぞ照り合(あ)へりける

或る新墓

朝は見て息もつきあへずあら墓や力張りきる鐵砲百合の花

新土(あらつち)は朝にいつくし雨名殘いとどしくすがし鐵砲百合もよし

祭の夜

接待の泡盛は琉球の大甕なり

吾が門(かど)の向ひの墓の夕月夜水うたせたるおしろいのはな

氣色(けしき)だち神輿(みこし)練り來(く)るゆふぐれは茅蜩(かなかな)のこゑも墓地にとほれり

水うちて月の門邊(かどべ)となりにけり泡盛の甕(かめ)に柄杓添へ置く

市中(いちなか)は殘る暑さを樫の森や月あかうして向ひ墓原

墓原や石の角目(かどめ)に照る月の光うち蒼み夜ただ木(こ)しづく

萼の花

萼(がく)のいろ雨に浮きたり。呼びそめぬ、ラヂオのニユース、フラン落ち、巴里暴動す、ポアンカレーまた世に出でむ。子らよよし、冷麥(ひやむぎ)食べむ、實山椒は奴(やつこ)につけむ、月待ちがてら。

※・こほろぎの髄

残暑

墓原の木立に暑き蝉のこゑじんじんときこえ今日も久しき

この暑さまだし堪ふべし色褪せて萼(がく)あぢさゐはほろほろの花

日のほてりはげしけれども石の間(ま)や細葉のつつじ株さびにけり

羽蟲

墓地の十字路にて

夜目(よめ)ながら老木(おいき)の榎(えのき)洩る月のしろがねの網に狂ふものあり

百日紅咲く

展望

百日紅(ひやくじつこう)花いち早し眼はやりて向ひの墓地の今朝はすずしさ

風かよふ百日紅(ひやくじつこう)の花見れば立秋のけはひ既にうごけり

中垣

對(むか)ひ葉の枝の秀(ほ)ごとの紅(あか)き花百日紅(ひやくじつこう)のちらら咲き繼(つ)ぐ

門庭(かどには)をこなたへ咲きて中垣に影ちらつかす百日紅(さるすべり)の花

つくつくはふしひとつ來てゐる夕つかた袖垣のうへの百日紅(さるすべり)の花

墓地

百日紅(さるすべり)咲きつぐ道は吾が行きて利玄分骨の墓も涼しさ

百日紅(さるすべり)下照る道の石だたみ子とひろひつつ蚊のこゑ暑し

百日紅滑(さるすべりなめ)ら木肌(こはだ)のこぼれ日は花咲き足らひいとどしき搖れ

花あかき百日紅（ひやくじつこう）の下にして子が立ちとまる影のみじかさ

白秋の墓にて

この墓をすがしと思（も）へば差出（さしで）咲く向ひの墓の百日紅（さるすべり）のはな

本（もと）ごころさびしき時はここに來てしじ聽きにけりつくつくはふしのこゑ

彼岸前夜

花つみて一荷（ひとに）はのぼる馬ぐるま寛永寺坂に月は照りつつ

この月に佇む馬の尻向けて花屋が前は露しとどなり

入り廣き墓地のまともの宵月夜風とほじろし早き葉はちり

墓むらや月の光のながるればこちごちの石の濡れてはろけさ

月晝のごとし

本阿彌の露地出でて來れば狹霧立ち月晝のごとし墓の草原

芒（のぎ）の穗に小寥ひるがほをみなへし遊び歩（あり）かな月夜よろしみ

秋雨の朝

雨のあし秋づきぬらし椎の葉の前には見えてここだみじかき

塗りづくゑ今朝ひえびえしペン軸に蟷螂（かまきり）の眼はたたかれにけり

秋の夜書齋にて

髓立（すね）ててこほろぎあゆむ疊には砂糖のこなも灯（ひ）に光り沁む

秋の夜は前の書棚の素硝子に煙草火赤し我が映るなり

塔影

目に黒く木末（こずゑ）かがよふ星月夜御院殿坂をひたぶるのぼる

雨たもつ椎の木ずゑの土用芽のかすかに星に光るならむか

小夜中は五重の塔のはしばしに影澄みにけり小糠星屑（こぬかぼしくづ）

金輪際夜闇に根生ふ姿なり五重の塔は立てりけるかも

立てりけり星屑たぎる夜のくだち五重の塔は影くきやかに

青のつま朱の五重の塔の今眞闇なり鷺のしき啼き

星月夜九輪の塔の空たかくうち透かし見ればかよふすぢ雲

朝露

朝顔にまじるみどりのかもじぐさここらの墓の陰もうれしき

このあした露おびただしむきむきを穂に掻き垂れてゆら犬蓼

この墓やゑのころぐさの穂は濡れてえんまこほろぎも露まみれなり

秋ぐさ

花に遊ぶ

うゑまぜてしをりよろしき秋ぐさの花のさかりを見て遊ぶなり

曼珠沙華了る

曼珠沙華莖立しろくなりにけりこの花むらも久しかりにし

彼岸ばな今はおどろと巻鬚の朱もしらけたり長雨ふりにし

月夜の庭

よちよちと立ちあゆむ子が白の帽月のひかりを揺りこぼしつつ

木蘭の濃き影見れば良夜や月のひかりは庭にあかりぬ

竹柏の葉と木蘭の葉の影交し月は隣の家の上に來ぬ

家並の高きアンテナ月の夜は光りまさりぬ濡れにけらしも

照る月の夜空にまよふあるかなき薄翅かげろふの尾は引きにけり

深更月夜

板縁は月夜ふけつつ玻璃のかげ引きてゐにけり光る幾線

總玻璃のとのもの月夜ふけにけりしろくかびろく庭石は見ゆ

石の面に月の光は冷えはてて音ひとつ無しただにその影

月夜ふかし光しづもる木々の間に羽蟲かと思ふ影のちらつく

裏うがつ月の光となりにけり黝き茂みのゆづり葉の垂り

櫨紅葉

一木櫨いよよ照葉のことごとに染み出來にけり櫨はその葉に

觀つつあれば櫨の紅葉の一ひらちりまた二葉ちりぬ日の照る石に

石のべの櫨の落葉はよく掃きてまた眺め居り散りてたまるを

櫨紅葉下照る土はしめやぎて帚目正しちる二葉三葉

はらら散る櫨は落葉ぞおもしろき表火のごとく裏べ寂びたる

石のべに櫨の落葉を吹きためてはらときし風も止みゐたりける

紅葉に籠る

立襖は金泥をちらし、桔梗・薄・女郎花などを肉筆にて描きたり。

立襖もみぢにあかる夕の間を籠らふふかき日ざしなりける

※・冬と緑青

初冬の庭

色鳥

菩提樹の落つる葉早し尾を曳きてめづらにつどふ色鳥の影

刈りこみて

吾庭はみ冬ちかきに刈りこみて躑躅のほそり目に立ちにけり

空寒し今は葉も無き菩提樹の木膚(こはだ)かぐろく伐口(きりくち)のいろ

落葉のあと

ひえびえし冬の日ざしとなりにける土に落葉の光れる見れば

かへるでの枝こまごまとありにけり葉なみふるひて今はしづけさ

冬の椎

まれまれに椎の葉にもつたまり日(び)も照りはかへさず冷(ひ)えまさるらし

椎の葉に冬の日のあるほどほどはうれしき珠数の珠(たま)も磨るなり

氷雨の頃

錦木の時雨紅葉となりにけりふりみふらずみ日にくすみつつ

冬青(もち)の葉に走る氷雨(ひさめ)の音聽けば日のくれぐれはよく弾(はじ)くなり

冬に入る菊

目にたちて菊は白けど置く霜のむらさきの凍(し)み光こもれり

菊の香のこもりてぬくき冬日向蒲團の綿はゆたにうちつつ

冬日向

墓原の空地(あきち)に繁きゑのこぐさ子ら踏み荒らし地膚(ちはだ)すら出(で)つ

墓地裏も集(つど)ふ子供の影さむき冬の薄日(うすび)の照りとなりにき

墓地裏に騒ぐ子供のこゑきけばおほに澱(をど)めり霎かも來む

冬木

朝しぐれ塔の庇のあをあをと木立はづれに見えて寒けさ

向う墓地冬木したしくなりにけりこちごちの靄は落葉焚くなり

上光(うはひか)るけだし榎の乾葉(ひば)ならむこまごまと溝をふりうづめたる

凍土(いてつち)になにか落葉の二葉三葉朝早き風にそそ走りつつ

冬の夜の雨

冬の雨の石にひびかふ墓地の闇母と來る子は歩みとどめず

墓原を歸り來る子のこゑきけば氷雨(ひさめ)すさまじくふり亂るらし

をさな兒は軍歌うたひていさぎよし外套に靴に氷雨(ひさめ)はじき來る

寒月

枯枝に白銀(しろがね)かがる月の夜は光ほそうして冴(さ)えにけるかな

霜の庭隈

霜の凍(し)みいたもきびしき土のうへに南天の紅葉はらら散りたる

榊の實黝(くろ)ずむ觀れば袖垣の結(ゆ)ひ目も凍(し)みぬ霜の氣(け)に立ち

霜と南天

墓原の花すてどころ霜ふかしつくづくと今朝は我もきびしき

霜ふかき花すてどころ目につきて南天の實は鈴の赤玉

山茶花咲く

山茶花の最寄りの日向しづけくてたまたま來れば子らつどひけり

童(わらべ)どち足踏しつつまだ小(ち)さし山茶花あかく咲きにけるかな

朴の實凝る

たかだかと冬木の朱實(あけみ)垂りにけりきびしくも凍(し)むか向ひ墓原

寒の靄

暮の靄子が背嚢の毛に凍(し)みてしろく粒だつ寒(かん)到りけり

冬木原(ふゆきばらかん)寒の靄ごもり行き消ゆる人あし見れば暮せまりつつ

暮れぎはの寒(かん)の靄かかる冬木原(ふゆきばら)外套あかき子も來(きた)るなり

冬すでに頬のみ燃え立つ雄の雉子の駈け走る見れば日もつまりけり

縁先

石のべの紫蘭の莢に來て光る蜻蛉の翅も小さうなりにけり

白秋の墓にて一首

この墓に凍みつつ白き山茶花の蕊あざやけき寒は來りぬ

墓原の遅き月夜の石だたみ山茶花ちらし止む旋風あり

或る朝

今朝も見る閼伽の氷のさやけくて子はたたきゆく墓石ごとに

山茶花は末もつぼめど濃き紅の上凍くろしつひに開かず

雪

もんもりと雪ふりつもる朝まだき知音の墓は求めて親しさ

雪は觀て早き朝餐をたおたおと木ぶりをかしく揺り出しづけさ

薄墨とけぶる低めの空にしてよにしづけきは百日紅の雪

人踏みし雪の窪みに聲はしてなにかひもじき雀入りをり

さるすべり枝のぬめりにつむ雪の時しづれする聲のみしろし

雪に

むらさきのこもりしたしくなりにけり見てのみか居らむ薄き障子を

雪あかり早やすべしなし張りつよき白き障子に燈は向けてあらむ

霜とラヂオ

大君の御腦のニュースきこえ來ぬ絶えて音なき霜夜しづもり

霜の凝り堪へてこの夜もすわりたりラヂオのニュース聲せまりたり

霜くだる今宵のラヂオおぎろなし心とどろくひと時隔きに

霜の夜のラヂオのニュースはてにけり灯は明うしていたくしづけさ

縁の戸にひびく霜夜の玻璃の罅ひたなげき寝ず御寶我は

大君は神にしませばこの霜のとほる夜ふけは聽きておはさむ

大正天皇を悼み奉る歌

冷えとほるほどろの霜や冬青の葉の垂り葉の光ゆらぎ止みたる

現神天皇にましましてなほし常無く坐すがかしこさ

あらたまの年立ちかへる日は見えて神あがりましぬ霜のしろきに

健けく常は坐さずも大御命長く坐せよと仰ぎしものを

ほがらけき崇きたふとき大御業つがせたまひき短かかりにき

石の面にいやさむざむと日はかげりたづき知らずも生ける蟻蔭ふ

冬木の根に凍む土の張り乾きかうかうと響く道を行くなり

梅もどき

天王寺歌會即興、録二首

梅もどき籠に※しつつ用は無し來馴れし人の來れば待つなり

吾妹子が※してうれしき落霜紅オンスコツプのくちばしよしも

或る母と子

寒夜、日暮里驛のベンチに相抱きて曉に發つ汽車を待つ母と十一二の女の兒ありき。子は雛妓の見習に上京中、肺患のため母の迎ひを受け歸郷せんとするなり。あはれなれば家に伴ひ一夜を送らしむ。後その子死にたる由の報知來る。

母と子のおもざし見れば寒き燈にすべなしばたたきよく似たりけり

吹きさらしひびく霜夜にかきいだき母と子はありき温みとるとて

女童は繁に咳き入る寒き夜を小糠小星も風に冴えにき

ただにありき爐の火かきおこし寒むからむ温もりてよく寝よとのみ
われは

死にせりと母が書き來し文見ればその子が笑ひ力なかりし

墓原に風は吼えながら朝わたる月夜なりしか白みそめにき

子にくるむ衾そだたき一夜いねずたづきなかりけむか人の親母は

失火多し

この夜ごろ火に立ち騒ぎ止む間なしかぎりなく寒く人はまづしさ

すさまじき夜の火なりしか墓地ぬけて曉の霜に身ぶるふ今は

霜いたり空は濃青き夜の明けに筑波の山はくきやかに見つ

冬晴

柿の蔕黒くこごれる枝見ればみ冬はいたも晴つづくらし

春曇籠居

深廂晝もをぐらき家の内に灯はとぼしつつ春を待つわれは

とのぐもり煤の氣ふかく立ち舞へば咽喉ゑごくして春もくるしさ

春ひらく

何か花にほふ雨間の木のくれを妻とし歩くゆゑはしらずも

緑ヶ丘新唱

昭和二年の晩春より同三年の初夏に至る馬込緑ヶ丘の生活に由る。新らしき文化住宅地緑ヶ丘の突端にある此の馬込の新居は、明朗にして簡素、月・霧・燈・火の夜景は亦九十九谷の名にそむかず、少くとも近代詩趣の一年なり。

※・ウインネッケ出現

新居

吾が門は通草咲きつぎ質素なり日にけに透る童らがこゑ

厨戸は夏いち早し水かけて雫したたる蝦蛄のひと籠

玄關

この小さき鐘と撞木は前の主人の遺し置けるものなり

小さき鐘撞木とりそへ吊したりこの家のはひりすがしとも見よ

小さき鐘掛けてすがしきこのはひり戸は鎖しにけりそよぐ木の影

風そよぐヒマラヤ杉の二三本はひりの庭は今朝もすずしさ

吾が童鐘にとどかず脚立よりのびあがりうつ面仰向けて

小閑

戀しかる書は待てどもうつ鐘のまたわづらはし人にこそよれ

誰待つと家居るならずおなじくも憂ふる人の來よと思ふのみ

まれびとか或は來けらし軒鐘や音のさやかにふたつ鳴りたり

あやめ咲く

家垣の築土のあやめ咲きにけり童な手折り通りすがりを

あやめ咲く築土に添へば鴨跖草や隣もすずしふり亂る露

夕凪

蟆子の立口にかゆきか吾が童夕ばえの頃は聲はずむめり

月はあれど夕立つ雲の氣に見えてなにか逸れたる蒸しかへしなり

晝貌

日に闌くる草の香嗅げばこの崖や晝貌の咲く色もまじれり

晝貌は晝もあはれや容貌清き稚どちゐて草に坐りぬ

出現

二人の子供は隆太郎と篁子なり

草生には出で入る子らが二人ゐて晝ふかきかなや大き星見ゆ

月のごと大き星晝の空にありウィンネッケよあはれ人は貧しさ

木の花咲く

うち開くわが屋は高しゆりの木のほづえに花も現れにけり

大き鳶たわたわと來て過ぎるとき穗にあざやけき丹波栗の花

隆太郎

大き※今朝うちひらき朗らなり芝の刈生に子は飛び下りる

白き柵をどり越え來てわが太郎※這ひあがるこの朝づく日

卵

梅雨ふかし薄ごもりに生みためて鷄の卵の光澤も失せぬる

卵ひとつ生まずあはれと見つつゐし生みてありけり鷄は草生に

送梅

半夏生早や近からし桐の葉に今朝ひびく雨を二階にて聴く

しやしやと來て篠懸の葉をひるがへす青水無月の雨ぞ此の雨

斷層

斷層の青萱見れば吹きなびく風竝しるしかがやきにけり

やや黄なる風景

梧桐のふふめる花の穗に立てば二階も暑し※は開け置く

日は午なり靄たちこむる向う空にカキ色の氣球熱しきりたる

午の坂黄なるドレスののぼりゐて電柱の影が彎みたり見ゆ

架橋風景

憤怒堪へつつのぼる我が歩み陸橋にかかり夏の富士見ゆ

陽炎の搖りあふる見れば朱の桁や鐵橋はいまだ架け了へずけり

かうかうと鐵の鋲うつ子ら見れば朱の鐵橋は雲に響けり

蒸す雲の立雲思へば息の緒に息こらへ立つ憤怒の神

こまごまと茱萸の鈴花砂利に散りあはれなるかなや照りのはげしさ

吾家の坂

日は暑しのぼり險しき坂なかば築石垣のこほろぎのこゑ

白榮の暑き日でりの竹煮ぐさ粉にふきいでていきれぬるかも

盆地の蛙

馬込盆地の暑き小峽にうちひびき蛙は啼けり草いきれ立ち

聲合す草田のかはづ晝闌けて間を啼きしぶれ深むものあり

千樫

末つひに人の命は長からじ眼には笑(ゑ)みつつ肩喘ぎけり

水さしに水はあらぬをほそぼそと吸ひほけにけり透きとほるもの

かくしつつ人の命は過ぎなむやちかぢかと眼を寄せて見むとす

眼力(まなぢから)かくのごとくば眞夏さらずあはれほそぼそと人は死にせむ

山なすここだくの書(ふみ)ほこりつもり暑き日なかを息繼げり君は

生きざらむ命思はず仰ぎ寝て手は拱(く)みにけり敢て息繼(つ)ぎ

下冷(したひ)えて額(ひたひ)ににじむ薄ら汗おもほえばしじに君も生きにき

二階に咳ひびきけりかいかがみ今はすべしなし靴の紐むすぶ

おもての光くわうくわうと流れたり強ひてまともに眼は向けて出(で)つ

いたいたし脚のほそりの眼をさらず我は踏みありく光る直土(ひたつち)

眞夏過ぎ簾(すだれ)うごかす廂合(ひあはひ)の朝の涼(すず)かぜを君はたのめぬ

百合木と猫

うちそよぎ風吹きかよふゆりの葉に朝は朝日の透きてすずしさ

廣き葉の半(なかば)は黄なる本(もと)つ枝(え)に早や風涼しうちかがむ猫

夏野

ひとすぢに夏野よこぎる道しろしおのづからなる歩みつづけむ

道のべの車前草(おほばこ)硬(かた)くなりにけり眞日(まひ)明(あか)うして群るる子鴉

風に觀る

風ひびく葉廣篠懸諸枝(はびろすずかけもろえ)立ちあざやけきさ青(を)の火立騰(ほだちあが)れり

ポプラ葉のかがよふ見れば涼風立ちさながらに日の光るさざなみ

吹く風の幅は揉みぬく栗の葉の葉あひに青く毬(いが)の群れたる

永瀬夫人を弔す

夕かげのおもてに移る合歓の花ほのかに君もねむりたまひぬ

赤松

いとどしき殘暑の照りとなりにける繁立ほそきその赤松に

赤松の直立つ見ればあきらけく正面の西日木膚照らせり

夕かげはにほひこめつつ靄ごめに疊みよろしき松が枝の笠

赤松の一木が撓る向う丘夕かげの中に風の吹きしく

夕早く風にさはめく赤松の林のほそみ見るがすずしさ

洗足の池

み寺には百日紅の閑かなり洗足の池の夏も過ぎたる

池のべの楊が傍に咲きあかる漆の花はまだあはれなり

現世の漆の花のひと木立臈たくしろき月空にあり

みなぎらふ夏の光も過ぎにけりわが對ふ池の薄らさざなみ

殘暑の日ざし冷め來るさざら波ただひとりなる舟は遣るなり

九月中旬の或る朝

竹煮草今は穗に垂りしづかなり鶸茶の莢の朱のいろの液

隣りびとW. Timacus の厨には※はうち開きフライパンが見ゆ

露つけて今朝すばらしく眞青なりうしのしつぺいの放射線の芒

露草は朝露しげし今朝咲きて涼しかるらし黄の小蕊立ち

松の木間栗の花ぶさ返り咲き日光室に日の光る見ゆ

朝霧

朝めざめ清にすがしき戸は開けてヒマラヤ杉は大粒の霧

吾が起きてただに瞰下す門の戸を濃霧しづもり谷地はこもりぬ

森と言へば叢立つ霧のこちごちに氣高く厚く壘立てたる

朝月夜いまだも夜霧とどこほりひむがしの丘に日あし立ちたる

高き屋に光射し滿つ我が丘を明暗の谷の街ぞとどろく

月とヒマラヤ杉

※ちかきヒマラヤ杉の秀は揺れて光り來にけり月出づる方

わが門はヒマラヤ杉の朝月夜影がそよげり鋪石のうへに

※・月・霧・燈火

谷の馬込

馬込は谷おほき里、とりよろふ丘の岬々、朝に夜に狹霧立ち立つ。高※や東に開き、西をあけ、南もあけて、うち透かす賑ふ灯、山中のみ湯のさまかも、月さへも紫明る。霧はおもしろ。

篁子

女童が※毛にやどる露のたま月のありかは雲の上にして

木の間洩る谷地の灯あしの線引きて蛙が啼けば子は寢ぬるもの

月に佇つもの

ひとり行く

ひとり行く歩みとどめて眺めけり水芋の葉に月の宿れる

おのづから歩みはとまる道すがら芋の立葉のことごとの露

美童に遇ふ

月を指す幼兒ゆゑにあはれとはいみじかりけることを言ひつる

珠ごと露の立葉に月は照り清き童の面あげて佇つ

犬の吠近き月夜の野路の霧誰かころろと歩みかへしつ

清らけき母を思へば月の面に微塵の氷吹きつくる影

白鷺の月に見えつつ飛ぶ影は正眼(まさめ)ながらに霧しまきつつ

夜、風に思ふ

母を思ふ現(うつつ)の聲や夜風の硝子戸たたき消ゆる疾足(はやあし)

秋ちかき

秋ちかき月の夜ごろは雲と言へばしろく流れて片明りつつ

涼しさははてなかるらし眞木山や隣る月夜の小竹(さざ)の葉にして

庭隈

影いくつ涼し月夜や古木の梅つつじ藤錦木ほそき孟宗

梨の棚あをきすはえに照る月の光しづもり鳥屋(とや)の戸も見ゆ

或る月の夜

草ごもるかけろ探すと子らは出て月にわけをり薄き月夜に

掻きわけて涼しきものは篶(すず)の秀(ほ)や月の夜ごろの山いもの花

篶の葉に月の光は遊べども吾が利心(とこころ)よいまだ和(なご)まず

咲くものはつひにあはれよ月夜(つくよ)照り山いもの蔓にそよぐ涼風

おもしろの月の夜ごろや草に居て眼に入る物の風そよぐなり

夕月映

かぎろひの夕月映(ゆふつくばえ)の下びにはすでに暮れたる木の群が見ゆ

月の照り匂だち來(く)る雲ながら木原が上は色のさむけさ

月の映(はえ)こもりてしろき夜の靄に煙かと思ふ色ぞうごける

遠じろくうごくけむりのふたながれ月の光も渡りつつあり

ひと時は夕月映にめづらしき遠近(をちこち)の谷の早き燈火(ともしび)

紫の月

馬込は霧多ければ圓月もまた紫に見ゆることあり、光悦の屏風と思ひ合せて

中明(なかあか)る紫の月丘にあり秋ぐさの花の亂れたるかも

桔梗(きちかう)の月にさやけき松が根はひとりかがむにしくものぞなき

遲き夜二景

洩れいづる月の斜光となりにけり雨は盆地の灯(ひ)をたたきつつ

匂だち濕(しめ)らふ雲の影見れば小夜ふけと月もふけて和(な)ぎなむ

月のあなた

はるばるとわたる月夜のうろこ雲現(うつ)しき母の子をかかへ佇(た)つ

月夜よし遠き梢に下(お)り疊む白木綿雲(しらゆふぐも)は雪のごと見ゆ

月夜俯瞰

月高し谷地(やち)の夜霧に尖(とが)り出(で)て急勾配の濃小豆(こあづき)の屋根

しゆうしゆうと夜霧ながれてありにけり月に光るは玻璃の屋根のみ

月夜靜坐

二階の和室にて

硝子※月に開きて坐りけりつくゑにうつる壺と筆の影

筆立のとりどりの影しづかなり月夜ふけつつひとり坐るに

塵ひとつ月に留めじと思ふなり勠朱(うるみ)の塗(ぬり)の清(さや)の文机(ふづくゑ)

ふけつくし月の騒ぎも過ぎにけり梧桐(あをぎり)の葉に今は澄みたる

つくづくと觀る月ならし夜の遲き光に妻が面向(おもて)けたる

さる樂人

目は盲ひて笑かすかにおはすなり月のひかりの照らす面白

※・剥製の栗鼠

秋さびしもののともしさひと本の野稗の垂穂瓶にさしたり

千樫

秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさびたる見れば

同

草の穂

秋ふけぬ物の葉ずゑに立つ蟆子のかそけき光ただに思はむ

稗草の穂向にちらふ蟆子のかげ驚きて思ふうらさびにけり

さびさびて今は光らぬ野稗の穂親しかりにし人も死にせり

野稗の穂瓶にさしつつうらさぶしかくのごとくや人の坐りし

吾が門は電柱の根に夕日さしうらがれぐさの穂が映るなり

§

草の穂に移ろひはやき日のあたりこのごろはわれも病みやすくして

觀艦式の日

家にこもりて

皇禮砲とどろと響き雨間なり柿のもみぢがうつくしく見ゆ

航空船黄にうかび來てとどろけりなにかはさむき日の曇りなり

はらら飛ぶ小禽あはれと觀つつゐて霜の葉おほき木々に驚く

とのぐもり羽ばたきとよむ飛行機は向ふ時雨に今は列竝(つらな)む

菊

吾が庭は白き小菊の銭菊のただに明(あか)りて朝の濃き霜

菊の花酢にひたしつつうらさぶしかくしつつこそ秋も過ぎなむ

白菊の青み冴(さ)え來(く)る夜の寒さ百燭のあかり近く寄せ置く

子を呼ぶ

御會式の萬燈あかく山を去り蹤(つ)きゆける太郎この夜歸らず

子を呼べばまばたきすもよこの夜さり谷地(やち)の灯(ひ)あしが※毛(まつげ)なし見ゆ

父われの大き靴はき童(わらべ)なり萬燈に蹤(つ)きていづち向き行く

わが聽くは小さき足音ひとつのみ夜は暗くして群の足音

灯(ひ)は多しもとも大きくみづみづし紫の燭(しよく)は映畫館ならむ

錦木の秋

吾が庭は若木錦木もみぢして椎の根方も照りとほり見ゆ

時雨のころ

光無き冬の入日の朱(しゆ)のおぼろ西の曇りのあやにしづけさ

神無月(かんなづき)合歡(ねむ)の老木(おいき)のもみぢ葉のすでにわびしく濡れわたるめり

朝にけに時雨なづさふ雜木(ざふき)立最寄(もよ)りの丘も染(し)みて來にける

短日

十方に放つ黃金(こがね)の日あしなり欅の寒き冬の木のうへ

群禽(むらどり)の木末(こずゑ)にきほふひとなだれ遠(とほ)のながめも寂(さ)びあまりけり

み冬づく丘の家居(いへゐ)に立つけぶり湯氣おほけれやあたたかく見ゆ

目にたのむ寒き木(こ)の間(ま)の赤屋根も煙見せつついつか暮れたり

暮れにけり師走の谷地の家びさしにこごりて白き寒靄のいろ

落葉の庭

こま形の銀杏の散葉黄に沍えてその向き向きを霜のよろしさ

土に凍みて今朝の落葉はおびただし木履つつかけそこら掃きゐる

黄なる葉と褐色の葉とちりにけり黄なる銀杏がまれにこまかさ

枯れつつし色に目だたぬ雑木やま向ひは霜の晴れにたるらし

立ちほそり寒き木ゐゑに裸木や霜朝の空に末光るなり

坂下

冬の日の光沍えたつ淺葱は添ひゆく子らの頬に映るらし

ほろほろと行くにくづるる崖の土こごりきびしき霜ぞ立ちたる

霜ばしら

男の童父の杖とり犇とうつ霜柱しろし此の霜ばしら

こごり立ちしづけかりしかひた乾く地膚はららかし踏む霜ばしら

砧村

隆太郎を砧村の成城學園に入學せしむべく、先づ行きて參觀す。

濃き霜の凍みてさやけき冬菜畑に朝の響の來つつしづけさ

霜いたる冬の玉菜は蕚しべにきびしく結ひぬその株ごとに

朝凍の大野の霜となりにけり早やあざやかに冬菜積みたる

清々に根引く冬菜は野に積みて置き足らはしぬ横山のごと

水のべに洗ふ大根をさわさわに見つつわが行くしろき大根を

み冬づくくぬぎ林に子らと來て落葉踏みたつる音のひもじさ

くぬぎ原ぬけつつとほる貸家の庭霜くづれ黒し落葉まじり踏む

子を負ひて切通しゆく影寒しこのあたり低き雜木ひと山

妹の家

風後(かざあと)の冬の日あしにありにけり通草(あけび)の散葉(ちりは)いまだ青きに

このとぼそ晝も鎖(さ)しつつ寒けさよ日は光りつつ一木(ひとき)白樺

風すさぶ一木(ひとき)白樺月夜には影いさぎよし葉竝ふるひぬ

牧舍

草くづと土糞(どぶん)焚(た)きつぐこの日ぐれ五六頭は居らし牛の立ちつつ

寒夜

寒(かん)の月響く夜空となりにけりしろき梢の繁(し)み立(た)つ仰げば

冬木照る月夜すがらやまれまれは山片附きて走る雹あり

白き野菜

白くのみ月にかがやくひと束は紫うすき根の蓮(はちす)らし

白菜(はくさい)はみながら白し月の夜と霜の光にうづだかく積む

白き菜と紫うすき根の蓮(はちす)冬はさやかに厨戸にあり

鳩

唐晝風

白菜(はくさい)の霜にかがよふ夜明け方歩き歩(あり)きて鳩は眼聰(めざと)さ

寒曉

しらしらと朝行く鷺の影見れば高くは飛ばず寒き水の田

下(お)り盡す一夜(ひとよ)の霜やこの曉(あけ)をほろんちょちょちょと澄む鳥のこゑ

水禽

かげ寒き池の水面(みのも)やつれづれと家鴨(あひる)およげり鴛鴦(をしどり)を前に

尻あげて水に竝(な)みゆく水禽(みづとり)のちらら後掻(あとか)くふりの寒けさ

冬の道路

畑なぞへ冬の砂利道行きのぼる柚子色の帽は悲しきごとし

夕凍(ゆふじみ)にむらさきしきぶ數(かず)光り電線は切れて橋に垂れたり

冬の土

冬の道くだりてのぼる木原山射的の音がひどく確かさ

冬の土ひた乾くから小胸(をむね)張りかうかうと行く小學生なり

剥製の栗鼠

とまり木にからみて朱(あか)き鳥瓜毛は荒しもよ剥製の栗鼠

頤ひげをくひ反(そ)らしつつ愚かなり剥製の栗鼠を氷雨(ひさめ)にぞ置く

冬ちかき一望の寂映(さびうつ)りゐる剥製の栗鼠の大き眼の玻璃

寂しくも遊ぶ暇(いとま)は無き我を剥製の栗鼠はしづけくあるらし

秋冬を心むなしき夕ながめ剥製の栗鼠は眼の光るあはれ

寒空

いつまでか長き日あしぞ炎立(だ)ち冬木にたぎる寒空のいろ

寒(かん)の土に佇(た)ちつくしつつかそけさよ冬は螢も飛ばぬものをよ

冬に立つもの

末ほそく下枝(しづえ)引き張るたけ高きヒマラヤ杉は冬によき杉

さんさんとヒマラヤ杉を洩る月の後夜(ごや)たちにけり冬に立つ影

椿咲く

わらべどち憎む境の切崖は陸橋がかかり椿花むら

花深く紅き椿や下枝さへ光るばかりを上にも上にも

小學生ら聲放りあげて行きにけり椿の花がひたあかきなり

花ふかき椿はすごしつらつらと出て來てはくぐる子らが足竝

老椿下照る道の春の泥洗足の池はけだしこの奥

雪の夜

雪つもる※の内らのゆふつかた火映親し誰か爐に居る

雪しづりけはひ幽けき夜の間にも紅毛びとは火にか樂しむ

マントルピース火立華やぐかたへには金髪のふさ透りゆらげり

穩しき笑なるかも片頬照り爐に寄る母の何か言ひつる

老びとの紅き上衣はをさなくて灯にものがなし毛絲編みをる

春日展望

咲きあかる花かあらしも木原山松の木のまのしろきを見れば

櫻咲き馬込の谷もしづかなり霞むかぎりがしろくのみ見ゆ

向丘の木のまに見ゆる赤がはら家古風にして春日おだやか

本門寺の裏山道ののぼりおり松の木のまの山ざくら花

花曇源藏原の夕影にみづみづし燈のひかりいでたる

女童

九歳にて變質の子なり。ひそかに訪れてやまず。

をさなきはをさなかれよと數花の通草の門に立たせつるかな

女童は心くるへり崖の端のほのかに萎ふ晝貌の花

晝貌やここだかなしき女童を日ざかりの門に隔てさぶしき

うち見には童なれども女子やまさなきことも美しみ思ふ

つきほなくかなしかるかなかがなべて年のへだたりは三十あまり五つ

言ふことはねびてきこゆれ女童や母を離れてなどか死にせむ

夏衣の生絹が裾の高踵なんぞ童が少女さびする

女童は水に戯ゆるしろがねの鱗のごとかなしかりけり

草上晝餉

晝餉には庭の芝生にぢかに坐りわが眼先のかきつばたの花

飯粒に沁みつつ白き日のひかり子ら食みあまし父われが食む

短夜追憶

消え易き花火思へば短夜は玉とうちあげる青き蓋

水の上や夏は花火の宵々にひかる投網をかいひろげ消つ

短夜の馬込なりしか梟と木菟のこゑの互みにはして

砧村へ移る

子鴉は嘴黄なり車前草や穂に立つ道の埃踏みつつ

馬込緑ヶ丘

五年の後

馬込緑ヶ丘、この門のヒマラヤ杉、來て見れば木高くなりぬ。夜寒にも燈はとぼりをり。人や來て住みつきたらし、わがごとやこもり息づく。星月夜、狭霧立ち立つ、この家の、鐘と撞木がいよなつかしも。

§

秀に揺れていよよ木高き影見れば下枝もふかく曳きにけるかな

たけ高きヒマラヤ杉の星月夜二階の※に灯のうごく見ゆ

§

門庭よ冬の夜寒も燈は洩れて住みつきたらし人香こもれり

この門よ槇も通草も目立たずてすがしかりしか雨つづりつつ

世田ヶ谷風塵抄

※・月に飛ぶ雪

言祝

大君、日の本の若き大君、神ながら朗らけき現人神。青空やかぎりなき、國土やゆるぎなき。萬づ世の皇統、皇孫や天津日繼。ああ我が天皇。大君、道の大君、大稜威。今こそは依り立たせ、けふこそは照り立たせ。高御座輝き滿つ、日の御座ただ照り滿つ。御劍や御光添ひ、御璽やいや榮えに、數多の御鏡や勾玉や、さやさやし御茵や、照り足らはせ。大君、我が大君、現つ神、神ゐるに、雲の上への照る日の光　采りてますかも。

反歌

黄櫨染の大御衣明く照り立たし彌さやさやに若き大君

昭和三年初夏より同じく六年の同じ季節に至る、四年間の、世田ヶ谷若林の生活に由る。尤も三年には歌作乏し。家は街道にのぞみ、囂音と塵埃と筆硯の繫鎖とに苦しめらる。しかれども邸内廣く、花木多く、奥の庭やや古風にして四時眼を樂ましむ。日常之に添ひ、風韻幽かに成る。

楓紅葉

かくばかり楓(かへで)ありとは知らざりき繼(つ)ぎ繼(つ)ぎて染む秋を驚く

この庭に一木二木(ひときふたき)と照らひたるかへるで紅葉時了りけり

背戸

鶏頭はつぶさに黒き種子(たね)ながら鶏冠(とさか)の紅(あけ)よ燃えつきずけり

わが背戸は食用菊の黄の花の殘りとぼしく霜の滴(た)りつつ

冬朝

石庭(せきてい)に冬の日のさしあらはなりまだ凍(し)みきらぬ青苔のいろ

庭苔に木の根影ひく朝の間(ま)は冬も幽(かす)かに美しくして

木(こ)のま洩る冬の朝日のすがしくて時ならぬ土のかをり息づく

うすうすと朝日さし來る椎の根に心寄せつつ冬はこもれり

檜葉垣の外(そと)とほりゆく影ながら早や親しもよ冬は透き見ゆ

木槲の冬

木※(もつこく)の一木(ひとき)の表圃(おもてた)けにけりみ冬ながらに日ざしもちつつ

木※(もつこく)の葉洩れ日見つつ思ふなり濡石に出でて歩(あり)く蟻ゐず

短日

向ひ見る冬の梢となりにけり細みつくして眺めまさりぬ

晝餉(ひるげ)過ぎいくら經(た)たぬを木群(こむら)には早やしろじろとかかる夕霧

軍馬

この日ごろ近き空地(あきち)に來て騒(さや)ぐ軍馬ありけり風の夜寒(よさむ)を

軍馬の群この夜とどとし來て居りと思ふだによしを千葉聯隊の馬

觀兵式の豫行演習に朝出でて夜は寢(ね)に還る軍馬の群らし

§

山茶花や井の水汲むと來る兵のバケツ音立てぬその凍土に
兵士來て井の水汲むと我が太郎眼もまじろがず山茶花の午後を

§

夕凍を子らと見に出るとなり原軍馬は群れて還りゐにけり
夜に還り朝發つ馬の草床は風吹きぬけて置く屋根も無し
濃霜置き軍馬入り臥す隣原夜はふかくして騷ぎぬるかも
霜は滿ち軍馬のたむろしづもらず糠星の數のただにきらめく
夜のほどろ騷ぎ立ちゆく音すなり觀兵式に列なる馬なり
大君のけふみそなはす軍馬なれ蹄の音もさやかに發つべし

§

駒竝めて兵還り來ず代々木よりただち本隊へ駈けにたるらし
隣の原また騷ぐなし風のみぞ夜どほし寒き空に地にきこゆ
夜はしげく軍馬寢に來し草の原馬臭き肌のこもりかなしも
寢ねがてぬ軍馬なりしか夜に聽きてなにか心に觸るるものありき

その後の夜

常ならず物の幽けくきこえゐて今宵の雲は凍みこごるなり

ある冬の日

日おもては雜木にこもる霜の氣の照りあたたかし春めきしかも
輝かでにほふ垣内の芝生には冬の日ざしぞ和ぎたまりたる

水邊早春

青鷺にしら鷺まじりあはれなり氷のひびの水に薄きを
坎もやや角ぐむ葦のさ青の芽に電球がひとつ流れ寄りつつ

書齋と月

疊(たたな)はる木群(こむら)のうしろ明るめり月の光の立ちそめにけり

硝子戸にのぼりて黄なる圓き月瑜伽師地論を讀みつぐ我は

青葡萄の頃

破(や)れはててむなしき鳥屋(とや)の葡萄棚葡萄の房は垂りそめにけり

むべの棚いまだ青けどひえびえと日ざしとほりて風うごくなり

九月

もちの葉の葉越しに見ゆるわくら葉は櫻なるらしよくそよぎつつ

木のうれにふけつつ澱む夜の曇り甜瓜(メロン)のごとき月黄ばみ在り

夏をこもる

高々とのうぜんかづら咲きにけりただにあはれと觀つつ籠らむ

家垣のひともと木槿(むくげ)光發(さ)し開くただちを土埃(つちほこり)來(く)る

もちの木は葉につむ埃(ほこり)いちじるしじりじりと照る眞日の光を

街道の地響(ぢひびき)しげき日のさかり鏡にうごく木はちすの花書齋

※の上(へ)に垂りつつそよぐ蔦かづら涼風たちて實の綴(そ)り初む

萩のくさぐさを

吾が宿の萩の中垣荒れはてぬいきれて暑き男ぐさの花

青萱の野萱にまじるさざれ萩この朝涼をすでに綴れり

颱風の逸(そ)れつつしげきあふり雨白萩の花のしとど濡れたる

夕ほてりこのごろつづく芝生には木の椅子が二(ふた)つ猫萩のはな

日時計の夕かげ長くなりにけり宮城野萩の叢咲(むらざき)の花

高野槇

からかさもみ、一名高野槇、或は金松

雨のふり觀の幽(かそ)けくて眞深(まぶか)なりからかさもみのしだり緒の笠

高野槇雨こまかなり秋もややけしきだちつつ冷えまさるらし

芝庭の小宴

田中智學、高村光雲兩翁、竝びに國醇會の人々を迎へて

芝庭の日向最寄りにくむ酒の老よろしもよ小春過ぎの雲

日向べは木々の紅葉の過ぎぬれどまだあたたかし莚敷き竝む

蔦紅葉

わが家は煙突の壁の蔦かづら日ましに染みて煙立てにけり

わが※は日向の壁の鍵の手を常春藤もみでて照りかへしつつ書齋

郁子と通草

わが家はポウチの棚の郁子の實のこよなく熟れて冬來りける

とり食めば核は多けど齒にしみてすがすがしかも郁子の實のつゆ

こもごもに郁子と通草をとり食みて郁子がよしちふこの子があはれ

郁子食むとひたぶるの子らやうちすすりしじに核吐き眼もまじろがず

おほかたに遊び足りたり夜ふけたり子らよ寢なむまた明日もあらむ

寒き日

多摩川に砂利あぐる音の風向をひと日きこえて寒あけずいまだ

日につのる寒さもちこたへ諸の葉のかがやける見れば椎よ冬の葉

思ひ屈しぬくき日あたり出て見ればかへるでの根に雪ぞ光れる

かがみゐて寒き日向や下心ふかく侮づる子らに隙與へけり

淡々と火の見の灯あしたちにけりすぐろにほそき木のこずゑより

霜に聽く

1．十一月五日深更、「赤い鳥童謠集」序成る

思ひ繼ぎ長きはしがき了へにけり夜ふけかすかに吠ゆるものあり

かんとうちて半鐘の音とめにけり火の消え方は夜も凍みるらむ

霜の空透きとほり青しこの曉や月は落ちつつ松二木見ゆ

2．十二月十三日夜より十四日拂曉に至る

夜ふけて寒くひびかふ音ながら沿線に住めばけだしよろしき

ひそかに吾が本質をうたがはず大禪寺柿に刃をすかとあてぬ

ゐろり火に蛇經を讀めばおもしろく身うちゆるがして走るリズムあり

夜はふけぬしゆんしゆんとして煮こごれる林檎のつゆの紅き酢醤

野砲隊とほりしがとどろきやまずいづべの霜に闌けにつつあらむ

しみしみと澄みて來にけりまさしくもしづかに霜に聽くべかるらし

絹笠に黒く粒だつ蠅ながらオスラムの熱冬を光れり

冬の夜は物の正しき影すらやただにすさまじく燈が明るのみ

幼さびかくて我あれやつゆだにも童ごころはけだしとほらず

冬の蠅そこら遊びし小夜ふけて居るものは無し凍みて來らしも

燈は明し大藏經のうしろゆく鼠の尻尾影うごくなり

常ながらおもて通るは夜發ちして多摩よりのぼる牛車かもあはれ

あけがたはいとどしづもる野の霜をひたすらや赤き電氣爐の息

遊行して障り無してふ日はあらずただになづみぬうちこもりつつ

武藏野に紫つづる蘇枋の果わが縛著は子ゆゑきびしき

東聲

前の夫人と別れたる頃のこと、及び挽歌

椎が根に素燒の鉢の三つ二つ見に寄るべくも花はあらざりき

家廂に及ぶ椎が枝そこらくを明りたのめて伐りし椎が枝

縁の端に日ざし頼めて見やる眼も力なかりけむか土をのみ君は

庭土にちりて久しき椎の花なげきこまかに君も堪へにき

※さきのちひさ篠の子篠の子の秀(ほ)の上(へ)にのぼり露は光りき

夜のほどろいつか寝入れるその頬には涙ながれて薄き髪の毛鹽原の一夜

いついつとえは諦(あきら)めずありけらし消(け)なば消(け)ぬかに末はなんぬる

木原山日暮れて寒き人あしの中のひとつの音絶えにけり挽歌

少年騎馬隊

十二三頭馬乘り入れて來りけりこの※(だく)を見よと少年騎馬隊

木※(もつこく)は冬によろしき門庭を馬糞火氣(まぐそほけ)立ち騎馬は足踏む

息しろく凛々しかるかも少年騎馬隊馬上敬禮の眼を向けにけり

夕凍(ゆふじみ)を門出(かど)づる子ら馬上なり早や疾駈(はやがけ)に駈けつつゆくらし

門庭に馬糞火氣(まぐそほけ)立ち日は寒しすべなあはれとわれは掃きをり

月に飛ぶ雪

この月を小竹(ささ)の葉叢(はむら)に影さして飛びちらふ見れば雪はおもしろ

寢帽(ナイトキャツプ)つけてまだ讀む月の午後(ごや)しきり粉雪のけはひさらめく

樂しみと

三月五日夜

樂しみと心こめゆく夜のさなか出で入るふかき息づきを吾れは

ほれぼれとおのれ遊ぶとたのたのと磨る墨のいろはひとり吾がもの

磨る墨やにじむ光の粒だちのにほひこまやかにのりて來るもの

樂しみとひとり恍(ほ)れつつ磨る墨はむべこまやかにとろりとあるべし

草假名は心ゆくなり細(ほそ)がきの面相(めんさう)に書けばなほとおもしろ

薄暮雪

落ちてけりあはれよと見るその棚の通草(あけび)とどとして積む雪とともに

雪のいろみなぎる見れば日の暮は下沈みつつよく積みにけり

雪片

寝室にて

玻璃の※桟の隙(すき)吹き吹きたまる雪片(せっぺん)しろし小夜ふけてける

夜はふかし隙間(すきま)吹き入る雪の粉の今は小床(をどこ)に飛び亂れ積む

夜のふけの鏡にうつり幽かなり雪片は白しつもりつつ澄む

寒鴨

水の手にさけぶ野鴨の數きけばねもごろならず月夜きびしき

※・春の銃眼

篠むら

吾が門(かど)のおもての細き美篶原(みすずはら)みすずは寒しよくしをりつつ

美篶原(みすずはら)風の戯(そば)えのよく見えて春早き朝の日の當(あた)りなり

目にしげき風の戯(そば)えは寒けれど美篶(みすず)が原よ春は來にけり

美篶(みすず)吹き篠(しの)吹く風の朝東(あさこち)風は目もすまにして音のさやけさ

春と言へどいまだ篠(すす)吹く風さきに楊(やなぎ)は枯れて影あらはなり

風の夜

風の吼え聽きつつくだつこの夜さり玻璃戸にうつり吾が顔は見ゆ

風の夜は暗くおぎろなし降るがごとき赤き棗を幻覺すわれは

しばしばも息吹きやすむ風息(かざいき)のこのけぶかさは冴(さ)えかへるなり

夜の風の息づきの間や下り沈む 蘭鑄 の尾鰭ひらきゆるがず

風の音すさぶこの夜の篠藪をほそくとほりて眞澄むこゑ何

うち向ふ春なりながら美篶吹き夜をしきり吹く風のするどさ

家垣を一夜あらしの吹き落す椿のあかき花もあらむあはれ

庭の木々にすさぶ夜風はさりながら咲きつつやあらむそのあるものは

この闇の木々吹きひらく夜風には少くも明き燈を向けてあらむ

オスラム電球ひたと見つめてゐたりけり何ぞ夜風の息のみじかさ

繁はじく椿の蕊の粉のひかり外の嵐に燈は動くらし

夜に起ちてはげしけれども物の芽に息つめて吹く風のうれしさ

息つめて却て冷えきる夜の風間繼ぎ吹く風はいまだ起らず

燈のもとに眼はひた向ふ妻とゐて何か後引く暗き野の吼え

玻璃の戸をがりりとかじる夜の風の白き齒すごし我は見むとす

ぬか星に猛る嵐の吹きあふる照葉の椎の鋭き光なり

黒松の葉がひに光る小糠星風の喚びを燈は消えにける

風の先またくしづもる小夜ふけて軋む夜聲の時をしむなり

風は夜はさだまりにけりうつ雨のはらはらと來てそれも止みたる

しきりなく自動車とほる夜のおもて間どほになれば黎明近し

春雨

菊子中耳炎を病む

耳いたむ妻とこもりて夜はふかし物のこまかにはじく雨あり

この夜ふけ聽けばこまかにきこえゐる小雨にしあれやそそぐ春雨

寢室の朝

二階、北と東の※

北の風吹きは入れどもこの※の隙あかりつつ菜のあをく見ゆ

百日紅(さるすべり)ねめりあかるき春さきは眼もぬくむなりその枝この枝

櫻を思ふ

櫻小學校に櫻の校歌成りにけり子ら歌ふ頃は花の咲かむぞ

襤褸市(ぼろいち)に冬は貧しき道の下(しも)櫻小學に通ふ子らはも

春意動く

移るべき家をさがすと春早し土耳古の帽をかぶりつつ出(い)づ

野の方にしろき煙の行く見ればおろそかならず春はうごけり

春もやや芽立(めだち)張り來る木々のまに瓦の屋根がうちかすみつつ

風道(かぜみち)にひかりてしろき花ひと木しきりにさびし何の花ぞも

この空の濕(しめ)りにあかる日の在處(ありど)梢はすでに紅(あか)み張りたる

山ゆけばしみみに戀(こほ)し日のさして黒木に萌ゆる色のやさしさ

春まさにねぶたの芽ぶきいちじるしちよろながるる水もおもしろ

つくばひ

つくばひの日あたりに見て春あさき土賊(とくさ)は硬し叢立(むらだ)ちにけり

つくばひの水に映ろふ赤松の木はだなりけり雲うすら行き

つくばひの上清(うはず)む水の底にして垢かぶりけり椎二葉三葉

風空

春と言へば日ましに乾く畑土の火山灰飛ばす錆いろの風

霾(つちぶ)らし嵐吹き立つ春さきは代々木野かけて朱(あけ)の風空(かざそら)

風面朱(かざおもてあけ)に吹き立つ春眞晝ゑぐき埃(ほこり)に食(じき)いとふなり

かき濁り霾(つちふ)る春やおぼほしく光無き外(と)に家さがしつつ

月のごと白き夕日や霾(つちぶ)らし澱(をど)む眞西の朱(あけ)のしづけさ

春雨を待つ

まだ寒く硝子の障子鎖し竝めてたまる埃の黄に濁りつつ

鶯やまれに梓の下枝に傍目すれども鳴く音しめらず

築山の菫咲く

土の膚乾く日向の薄ら影すみれの花はあてにやさしさ

築山の笹の根かたの日のあたりそよぐ菫は見れば幽けさ

家垣

家垣の椎の諸木の鏡葉の裏葉入り揉む雪おろしの風

風隠のぬくき垣内の高野槇これの一木の春のしづけさ

春の蚊立つ

椎のまに楓嫩芽のあざやけき吾が家垣を愛でてこもらふ

春の蚊の立ちそめにけり芽楓の下照りあかりしづけき土に

§

四阿屋に虎斑の竹の葉は落ちていささめながら雨ふれりけり

風竹を萬古の狸立てりけり春の日暮は愚かなるらし

§

うち沈み石の面蒼しかへるでの若葉明りに蚊のちらひをる

若葉していくら經たぬを楓の葉べりはあかく染み出すずしさ

春朝細雨

階上の東の※より

春は朝ほのぼのい凭る吾が※を小雨のり來るとべらの木見ゆ

石のべや若葉かへでとよくうつる春日燈籠に雨ふりにけり

築山の天滿宮に雨はふり春雨にあれやふたもと赤松

笠の松たゆらたゆらにありにける風ありとしも見えぬ春雨

おもしろの春雨やとぞ人の言ひにけるその雨ふれりさくらの花に

春雨のあと

中垣をこなたへ明る山吹の八重咲きの花は雨ふかき花

ここの庭ひろびろと雨の降りにけり朝出でて見る山吹の花

春晝落花

木※のしづけき空へちりかけて櫻はしろし光る花びら

木※の一木が陰の行潦さくらの花は漂ひにけり

春じめり散りたる花は滑岩に平に貼りつきいとどしき白

§

庭土に花びらしろき春眞晝つぶさに觀れば風あるかなき

風たまゆら土にしづけき花びらのひとつ舞ひ立ちはらら皆立つ

春まひる土移りする花びらの光りつつとまり後はしづけさ

石が根にともすれば寄る花の瓣風無かりけり動きつつ止む

新樹の頃

世田ヶ谷は欅竝木の若芽どき牛車つづきて騎兵隊がまた

欅木群寒けかりしか夏向ふ今いちじるし若芽萌え立つ

欅の木の芽立こそこまかなれ寢室の※は朝開け放つ

§

曇天に萌えつつひかる樫若葉浮びてしろき淨水池の塔

あさみどり芽ぶくくぬぎの木々の間に櫻は乏しちらひそめつつ

日にけに雜木の萌のかがやけば身はかいだるし胚芽米食ふ

若葉風揉み來る見ればおそらくは田には蛙の眼も光るらし

§

木のま透き花遠じろく見えにける若葉がくりになりにけるかな

木の芽ぶきいつかしづけくなりにけり葉に出づるものは葉に出たるらし

砲車タンク驀進

とみにあをむ芽ぶき楊や門いでて砲車とどろ來る音感じをる

春惜むこの家ゆするは日の闌けて砲車つづき來る永き地響

タンクの無限軌道の地響なり一臺が行きてまた續き來る

タンクの銃眼にすわる大きなる眼かがやけば春ふかむなり

木々若葉し日は照りかがやく地おもてを壓しひしぎ行くタンクの齒ぐるま

砲車トラツク裝甲車機關銃隊日毎とどろかす地響を吾れは

重砲隊とどろ壓し來る地響に叫び應ふる鷙鳥早や亡し

春宵

起床喇叭吹き習しゆく木の芽どき月夜にはよき夏向ふなり

春今宵喇叭吹きさしわが門を青年團ならむ何か言ひをる

二方に喇叭吹き合ふ寄るのおぼろ田にも蛙の啼き出したしさ

通草と雨

棚にして見のすがしきは雨あとの通草が綴る蔓の葉の萌

ぬか雨のちらちらにむすぶ雌雄のはな通草はすがし蜆いろの花

蜆花通草ちりしきおびただし時に搖りこぼす棚の上の雨

雨落に通草の花はちり泛きて中流れをり清きむらさき

雨たもつわか葉の通草すがすがし棚ぬけてそよぐことごとの蔓

風二三日

この硝子戸外の日の照りにわが見るは風の吹きまくる八重ざくらの

み

風の今朝八重のさくらはほたほたと吹きもぎられて色のさやけさ

柏槇

石のべに緑沁み出る嫩芽立はひびやくしんの春のすがしさ

清しくも今朝ふる雨や新葉立つ矮檜のいろの石に映ろふ

兵卒

肩章の三つ星を見よと來りけり手をあげにけり背は低き兵

汗ふくと軍帽をとり息づけり額のみしろき上等兵あはれ

此處に來し安けきかどかとあぐらゐて譽まさぐる兵卒あはれ

對ひゐて兵卒はにほひはげしけれ街道に遇ふ縦隊のにほひ

兵卒はくるしからむとこの照りを病ふなきかとただに見てわれは

椿朽つ

踏處なく見ゆる椿もおほかたは早や朽ちかけぬ紅きは三つ四つ

落ちかさみ闌くる椿やその花のひとつ紅きに蟻のぼりをる

吾が門

吾が門は築土の端の白薔薇おもてへは向かずこなたへと咲く

眺めゐてくぐりの白き花うばら出つはひりする子らがよろしさ

五月

わが庭の薔薇のとぼそ春過ぎてくれなゐ久し夏はくるしき

山吹の花ちりがたとなりぬれば蘇枋は染めぬ紫の枝

轉居の日近づきて

家移ると今あらためて見るものにこの家垣の椎よ芽楓

咲く花は後住(のち)む人の樂しみとのこしたらなむその草花は

雪つもる通草(あけび)の棚は飯食(いひは)むと朝夜よろしみ茶の間より見し

をはりの夜

ここに聽く遠き蛙の幼なごゑころころと聽けばころころときこゆ

砧村雜唱

昭和六年初夏より同八年の冬に至る、砧村の生活に由る。此の篇年次に章を分つ。此の砧村大藏の野に於ける鐵塔と雲との風景は快適、日月ともに明らかにして、季節の推移亦おのづからなる玄理にかなふ。自然隨順の三年なり。

※・白南風

初夏の代々木

明治神宮

若葉樫しきりかがよひ午(ひる)ちかし明治神宮の春蟬のこゑ

御庇(みひさし)の檜皮の黒み夏まけて映る若葉の清(さや)にまばゆさ

赤松の木群(こむら)しづけきここの宮椎の若葉の時いたりけり

夏向ふ五百枝嚴橿葉廣橿日にきらきらし若葉嚴橿

雨は今朝ふりながしけむ若葉橿や神苑の森は塵もとどめず

ここの宮光る若葉の葉ごもりに一羽雉子の聲ひらくなり

同じく西參道

明治神宮西參道の晝闌けて清きひと照りの風ぞ過ぎたる

晝の林泉光る若葉の靄ごめにまじりて黝き松のしづけさ

風透る廣き芝生の參り路は玉敷きならし目もすまの照り

神の苑木立おもての眞日照りを歩く雉子の一羽たふとさ

眼は向ふ芝生なだりの日のおもて寶物殿にうかぶ白雲

ほのぼのと眞晝はこもる靄ゆゑに一木のしろき花のめでたさ

お池にはいづくにも見る影ながら龜の子が搖る水際さざなみ

代々木練兵場

代々木練兵場朗らけく明し若葉どき上下八方にとどろく物音

代々木の空若葉盛りあがる色見れば青あり緑あり時闌くるあり

赤土に伏せのかまへの兵ふたり照りあきらけし見ざるべからず

砲車隊駛る夏野の日のさかり遠ざかり遠ざかり立つ後埃

新居前景

朝眼には若木櫻の葉ざくらの梢葉の紅の裏そよぎつつ

夏向ふ霞にあかる若葉木の木群のみどり盛り層むなり

田の遠は若葉かがやく日ざかりを往還の埃吹きつけはしれり

桐の花ふふむこなたの日おもては蛙が鳴きて水田さざなみ

白南風の頃

白南風の光葉の野薔薇過ぎにけりかはづのこゑも田にしめりつつ

大葉栗夏はこずゑの房花のさやかにあかり田毎代掻く

水口のえごのひと木の群花は田を植ゑそめていよよすがしさ

刈りしほと

刈しほと麥は刈られぬ。刈麥の穗麥は伏せて、畝竝にさららと置きぬ。麥刈れば戰ぐさみどり、畝の間にすでに伸びつる陸稻ならしも。

§

刈りしほと麥は刈られしこちごちをこのごろしろし馬鈴薯の花

熟麥の穗麥刈りとる畝間には早やつやつやし茄子の若笛

茄子畑は穗のみ刈りそぐ立莖の柵明し麥のしがらみ

農村月夜

西山野

月の夜はいとどかぐろき家の森を田には狹霧の引きわたるめり

狹霧立つ月の夜さりは村方の野よ香ばしく麥こがし熬る

東山野

月魄のしろき夜さりの離れ雲麥たたく音の村にさびしさ

水の田ちかく

朝なさな我が門いでて見るものにしみじみとよし植ゑし水の田

竹山のうすきみどりの朝じめり水の田ちかく見るがすずしさ

竹若葉

竹若葉みどりこまかき山方のひといろのなびき朝目にも見よ

わせ竹の若葉に霧らふ夏がすみ何か日中の音闌くるなり

前の植田

植ゑ竝めてみどりすずしき下の田を蝦も畦も見のあをみつつ

田の水に茅萱うつりゐしづかなりこのすがしさの眞晝經ちたる

田のあぜをこなたかがみに叉手つかふ人かげ見れば梅雨あがりけり

田は植ゑてうつりよろしき秦皮の若葉も過ぎぬ五四本づつ

畦竝木遅き若葉もふきたちて青葉がうれのまた明るなり

青一色

朝目覺清にすがしきこのごろは田面も畑も青よひと色

あさみどりしきり揺れ合ふ竹群は若竹の秀と風にすずしさ

夕べの青田

さしあかり夕かげあをき竝田にそよそよとある時化後の風

さ青の田に沁みつつひびく蝉のこゑ夕づきにけりうつくしき晴

梅雨長し

梅雨過ぎてなほも降りつぐ日癖雨このごろ見ねば庭も荒れたり

梅雨のまも桃の繁り葉末葉立ちまた掻き垂れぬ夏檜葉のうへ

梅雨あけの庭

梅雨あけの葉かげに照らふつぶら玉豐後梅は紅し花のごと見ゆ

コスモスの立莖あかき梅の根はこぼれ日つよし地靄立ちつつ

空のむた蒸しつつしろき日は暑し草いらふ手にひかる汗はや

土ほてり闌けつつもあるか日のさかり爪立ちてしろき猫はかまへぬ

外に出して晝は果敢なき鉢ながら瓢箪の花の夜は咲きにけり

月と水田

蛙鳴くくらき水田の夕澱み電柱に添ひて月のぼる見ゆ

圓けくも未だし光らぬ朱の月ひむがしの塵の澱みにぞ見ゆ

ゆらぎたちややに照り來る月の出を田には蛙のこゑしきるなり

短夜の月の表となりにけり蛙鳴く田がただ明うして

月の道いつか南へ下りぬらし光は涼し田にひたりつつ

雨夜月

雨夜にも裏ゆく月のしろじろと空あかりして闌くるものあり

棚曇かげ遠じろき月の夜は狭田の水田も澤のごと見ゆ

雨夜月陰はもてどもうすうすに田の水あかりかはづ音立つ

水の田の遅き月夜の時あかり泳ぐ蛙のくろくしづけさ

螢

闇を來てわれはいきづく小夜ふかく螢の光田の面移ろふ

月の出や稻葉爽立つ夜嵐に螢あふられ田の面立ち消ゆ

月夜風あふる田づらを消ゆと見し螢は高くまた光るあはれ

新月

うち蒼み暮れて間は無き西の手に早やあはあはしほそき新月

門畑やそよぐ陸稻の夜に入れば月ほそく見ゆ黒き屋のうへ

唐黍咲く

もろこしは花つけそめし上の穗に緑蜺蛉の翅ひらきつつ

唐黍や立穗の稚き八つ房に照りつくるしろき旱雲なれ

日ざかり

たぼたぼと蛙混み合ふ日のさかり田岸は白き虎の尾のはな

日ざかりの田中の勦きひとつ松夏はけはひに闌けにつつあり

日のさかり暑さ堪へゆく田のへりは桑の實黒く忍冬の花

唐辛子花咲く頃やほのぼのと炎天の畝に歪む人かげ

白小雲かがよふ野良の末にして鐵塔のよき間隔は見ゆ

竹煮草

竹※ぐさ朝行く月のわづかのみ穂には明りて風騒ぐめり

竹※ぐさ夕立つ雨の亂るれば風さへすさび心神(こころど)も無し

暑き日

身のほとり暑き日なかや眼につきて疊に猫の毛はつまみをる

蝉しぐれしづかにかよふ晝闌(た)けて子と組み立つる名古屋城の型

蝉時雨

蝉しぐれしづけき山に行き向ふ眞晝は明(あか)し我があるきつつ

蝉時雨ながらふ聽けば母の手の冷(つめ)たき手觸(たふ)り繁(し)みにおもほゆ

蝉のこゑしづもる山の晝闌(た)けて光る黒檜(くろび)の土用芽は見ゆ

茅蜩を聽く

東山野(ひがしさんや)この夕(よ)はじめてきく聲の茅蜩(かなかな)のこゑは竹にとほれり

ある月の夜

月すでにのぼりて淡(あは)き黄のしめり茅蜩(かなかな)のこゑぞ森にとほれる

紫は茄子の月夜の陰(かげ)ながら傍(わき)ゆく水のよく光るなり

月夜空高ゆく夏の薄雲は消えつつしあれど涼しかるらし

夜雨近し

雨夜雲(あまよぐも)移ろふ月のつぎつぎと先(さき)あかりつつすでに露けさ

月の晩景

猪子雲(ゐのこぐも)照り出(づ)る月の傍雲(わきぐも)の氣(け)に引く見れば茜細雲(あかねそぐも)

青き田

翔りけり狭田の青田のひと色にきようきようとしていち早き百舌

青き田の見はらしどころここにゐて二階は涼し風そよぐ見ゆ

目に移るさ青の稲田のそよろ風夕かげのいろと満ちてすずしさ

秋夕

うち向ふ竹の林の夕じめりひぐらしのこゑをひとり聴きゐる

氣色には匂のみなる夕霧の竹の端山にありてしづけさ

庭園の晩餐

天蛾

天蛾の翅あげて來るゆふべには夕顔の大き花もこそ咲け

父我は言にうちあげず月の出を大き天蛾の翅降りる見る

葡萄と月

一方に蛙啼く田のはるけくて月わたる下び雲堤引く

照る月に面ふりむけわがかざす葡萄の房のつぶら實の玉

房ながらまろき葡萄は仰向きて月の光にうちかざし食む

雛鳥の咽喉あけたる子が口に葡萄つぶら玉入れてをりわれは

曉闇

木群には早やも湧きたつ蝉のこゑまだあかつきの道はくらきを

蝉のこゑ湧きはたてどもこの朝やなにか勢ひにおとろへにけり

門前の影

朝ひらく白き木槿の門ながら夕さりさぶし花はつづかず

電柱の片側くらき月夜照り石ころに茅に露ぞ滿ちたる

卷積雲

白魚の移ろふ群のひとながれ初秋の雲の空にすずしさ

流れけり鱗だちつつ正眼(まさめ)にもすずしくしろくみなぎらふ雲

初秋月夜

月あかり水脈(みを)引く雲の波だちて夜空はすずし水のごと見ゆ

月に見て水脈(みを)だつ雲の風道(かざみち)は薄らにしろきものにぞありける

夕映の田

稔(みの)り田(だ)の夕映すごき乾田(ひだ)の泥(ひぢ)うち絶えて鳴かず蛙(かはづ)ひさしく

秋の田の穂向きに移る夕雲(ゆふぐも)の影迅くして後(あと)ぞ焼けたる

秋冷

葉鶏頭(かまつか)の火立(ほだち)にそよぐなるこびえ日は透(とほ)りつつ色の涼しさ

颱風(あらし)過ぎいたも冷えたる稔(みの)り田(だ)になにか蛙の時ならず鳴く

月の夜の庭

月夜よし二つ瓢(ふくべ)の青瓢(あをふくべ)あらへうふらへうと見つつおもしろ

ぬばたまの夜にして開く白き花大き夕顔の開ききりたる

檜葉の間

檜葉のまを移ろふ月のかげ洩れて涼しかりしか庭に出(で)て飲み

檜葉のまに光る蜘蛛ゐき月夜には揺れにたりしか絲もとどめず

秋日向

日の光染(し)みてすずしき群(むら)ぐさによき蟲のこゑのほそく立ちたる

帚草株立(かぶだちあか)紅くなりぬれば日射すずしか猫もつくばふ

何か猫草にとり食(は)みつくづくと舌なめずりぬけだし日は秋

秋雨ほそし

軒の端や青き瓢(ふくべ)にふる雨の雨あしほそくうちしぶきつつ

渡り鳥の道

その電線は庭のまなさきに見ゆ。

野分(のわき)だち翔(かけ)りつぎ來る秋鳥のきそふ鋭聲(とごゑ)は朝明(あさけ)まされり

群れわたる鳥かげ見れば秋空やただにひとすぢの道通るらし

つぎつぎと來て立つ見れば電線(はりがね)やこの空ぞ渡る秋鳥の道

秋分

よきかげよ向ひの松の木ぶりにも秋分の日射しづかにし見ゆ

秋祭

畷ゆきもみつつ勢(はや)る樽みこし夕かげに見えて稻は穗の波

樽(たる)みこし山のすそ田の夕かげに出てはずむなり霧な棚引き

この道

草堤夕かげ永し誰ならず我があゆむなりかく思ひあゆむ

秋のいろただにあはれと道芝の小砂利まじりに夕燒くる蹈む

秋山

なぐはしき山とふならね雜木立ただにしたしき秋ふかき山

雜木山朝に見あるき夕べにも見てめぐるなり足の向くまま

遠足の歸りを

朝出でて歸り來る子とあひにけり歩みつつ聽くその秋山を

相模の阿分利の山の秋山のなにの紅葉かもとも染めたる

菊

日ににほふ閑(しづ)かなる戸や門竝(かどなみ)の秋ふかうして黄菊咲きつぐ

秋まひる隣にふかむ菊の香のいつかこなたへうち匂ひつつ

月と霧

吾が門にさし入る月のかげ見れば昨夜(よべ)のあらしは激しかりにし

觀るものに月の光は流るれど山櫨(はまはじ)の葉にさらにすずしき

秋はいまさなかとぞ思ふ向つ岡月明(あか)うしてこの夜十六夜(いざよひ)

狹霧立ち冷(ひ)ゆる夜頃や先驅(さきが)けて月に向く子が髪毛かがよふ

月夜風しろくかがよふ穗すすきの旗手は長しなびかひにけり

§

架線橋つづきて霧(き)らふ空ながら線路は涼し月明う照り小田急線

ひと村に白くかぶさる乳房雲月の光の滴(た)りにけるかも

糯(もち)の田はいまださ青し夜霧立ち香に立つ稻のその葉さやらふ

ここの田の穗の垂り見れば月の夜やただに夜霧のむすびつつあり

十六夜(いざよひ)や月夜高きを濃き霧の煙幕の幅引きにつつあり

§

蓆戸(むしろど)やしまく夜霧をありありと灯(ひ)は赤く點(つ)けて芝居うつ子ら

ひといろの松蟲の音とぞなりにける夜霧ふり下(くだ)りここは松山

月に行く新懇道(にひばりみち)もたどたどし夜霧たちなびき伐りのこりの松

霧ふかく月もとどかぬわが前を影あやしかも歩(ある)きてぞをれ

この月をアンゴラ兎飼ふ家は霧ふかくとざし早や夜中なり

月明

草くづに見えて啼き澄む蟲のひげ月のひかりは水のごとあり

床下(ゆかした)に月の光は射し入れり球根が見ゆ數あかる蟻

※・氷の鱗

水上

石ばしる水のかかりの音立てて紫冷やき龍膽のはな

日のうちも狭霧こもらふ水上は紅葉さし出て冷やき岩室

枯山

雲間洩る寒き日すぢとなりにけり遠々に見る雑木々の立

冬山の枯山來ればいさぎよし甲にひびきて何か斫る音

枯山にはらら飛び交ふ小さき蝶黄翅せせりの影ぞ生きたる

この道の朽葉下凍みかそけさよあたる日射のそれも寒けさ

寂びつくししかも明るき端山木や時にはらら日ざしかがよふ

§

冬まひる雑木端山の日あたりを吹きあふる風の音のわびしさ

雑木山とよもす晝のこがらしはかうかうと寒し空へ吹きぬく

冬の土

庭の土風に罅だつ冬の曝れ鼠小走りただち隠れぬ

目もすまに凍みつつ玄き冬の土玻璃の缺片すら光りかへさず

冬の土こごりきびしくなりにけり球根を埋めてにじむもの待つ

冬の土しみみ掻きたる種床にひとりさやけさや白き猫ゐる

種床にうづくむ猫の今朝はゐて時ならぬ白き華ぞ咲きたる

霜

野にあれば季のうつりのしづかなり霜は明らかに人はすなほさ

三冬月谷地の畠のとりどりに霜置き足らし我ぞ歎ける

霜疊清にましろき萱の枯れ我が起き起きの心きびしさ

霜と言へば雜木の竝木染みつくす田川の岸も目に緊るなり

霜は今はいたりつくしてしづかなり畦つたひ來る庭鳥のこゑ

歳の暮に

形ばかり門に小松はうちつけてただに來向ふ春を待つわれは

篁を松をこの家に常に見てわが足れりけりなにぞ今さら

竹山

竹山はおもての小舍の蓆戸に日のあたりゐて寒き物音

篁の外に積む稻は乏しけど唐辛子赤く掛けつらね干す

冬の水

冷えちぎり洗ふ大根をその葉さへ寒の素水にわれは見つくす

冬はいましろくさやけき蓮の根の紫ひかる切口の孔

うち沈む飯粒見れば冬の田の後ゆく水も冷えとほりけり

常無きはいよよ清明けしさらさらに冬の淡水もながれ來にけり

冬の水いさら小川の日に透きて影うごく見れば流れつつあり

冬の田

裏の戸

群鷄の白き鷄ゐる背戸ながら田にはけざむき影ばかり見ゆ

晝の間も冬の田の面はけざむくて何か凍みつつ影のかぐろさ

氷雨ふる

冬の田の門田の泥にふる雨のこの夜氷雨の音立てにける

朝の田に澄みつつあかる水のいろ昨夜の氷雨かふりたまりたる

冬の田よしきり光れど日のうちもおほにかぐろくさむき稲茎

冬眠するもの

冬の田のこごれる泥にすむ魚の蛙の蛇のこゑもせなくに

土ふかく蛇はひそむととろほろと眼もつぶるらむ食べはせなくに

聲は無しただに月夜の田の泥におのれ身がくり冬眠るもの

足跡

冬の田の足跡見れば入り亂り氷雨たまれり深き水の田

氷の鱗

冬の田は稻ぐき黒き列並に鱗だちたり美き氷張り

冬の田に月の光の來るとき稻莖は見ゆさざら薄氷

冬の田の深田の氷罅びわれて月の夜頃はよく光るなり

冬夜

襖には猫の物食む大きかげ夜寒ひそかに吾れも食みをる

白き猫繁み身動ぐ毛のつやのしづかを霜は外にくだるらし

怪しく閑けかりしか夜明がた忽を霜の大いに到れり

眼を病みて

冬の夜のストーブ守れば我が行きし沙漠をぞおもふ駱駝の足音

夜は深しただにしづけくゐるわれをストーブの熱り痛む眼に來る

時ならず寒き夜ふけにとどろくは軍需品はこぶ貨車にかもあらむ

聽くものにはらつく冬の雨ながら月夜なりけり眼鏡拭きをる

雨と雪と

雨まじり雪かふるらし夜のふけを音には立ちつつ眼には白かり

うすうすと夜目にも雪ぞつもりけるあたりはいまだ雨の音して

早春月夜

うち騰(あが)り月は圓(まど)けき向う岡木の立寒し未(まだ)しきさらぎ

淺夜にはかすむ月夜も夜ふけにはただにわたりぬ冴(さ)えかへりつつ

早春の水田

前の田は乾き乾かぬ稻莖に日のあたるのみいまだ冬の田

田の水につづる氷の薄ら罅(ひび)春の日ざしは照りそめにける

§

水の田に薄氷(うすひ)ただよふ春さきはひえびえとよし映る雲行(くもゆき)

刈かぶや勁(くろ)き稻莖水ひかずひたりつくして冬もをはりぬ

春すでに刈田に黒き泥(ひぢ)の面(も)のふくらみ柔(やは)しうちにほひつつ

うちはずみにほふ青みや兵ふたり歩(ほ)のそろひをり田に映るかげ

長かりし冬のねぶりよ土いでて蛙は水にまだもとろみぬ

田の水光る

※山芽(しもとやま)ぐむ春日を水田にはまだひえびえと風のさざなみ

田の水に來寄るさざなみ刈株の列竝(つらなみ)のまに光るさざなみ

寂しき春

寒くのみいまだけぶらふ雜木原(ざふきばら)あゐむらさきに照る日かげりぬ

うち澱(をど)み春は病ましも水の田に映る曇の日を透かしつつ

蝌蚪

猫やなぎ花はぜそめて田川には蛙子(かへるこ)生れぬ繁(しみ)みかへる子

搖れ泳ぐ蛙子(かへるこ)見ればくろぐろとひたり水漬(みづ)きぬ底に群るるは

雨つづみ

雨(あま)づつみ薄き田の面の上清(うはずみ)におたまじやくしはよく泳ぐなり

かへる子はしじに濁せど道つけて薄ら水のる春の田の泥(どろ)
雨(あま)づつみにほへる見れば紫雲英田(げんげだ)や春の日永はよくふりにけり

春の田

春の田にうつつら啼き出(づ)る蟇のこゑえごの木の芽もひらきたるらし
萠えいでて柔(やは)き木の芽の或る梢(うれ)は白うかがやけり花かともあはれ

庭つ鳥あそぶ田の面に咲く花は野芹げんげん馬のあしがた
鶏(かけ)まじりあそぶ野鴨の埒なさよ水には入らず紫雲英田(げんげだ)にゐる
春の田にしじに闌(た)けゆく芹の花しろき鵞鳥の頸根(うなね)伏せたる
春茱萸やけむる嫩芽を田川には鵞ひとりが行き戻りつつ
田の圳(いり)は映る※の叢嫩芽(むらわかめ)この閑(しづ)けさをいまだ塞(せ)きたる

光なき空

霾(つちふ)らす春の嵐はとよもさず雉子(きぎす)鳴き立つ聲ぞとよもす
霾(つちふ)らす風(かざ)あし見れば吹き亂りひと日濁れり光なき空

初蛙

吾が門よ夜ふけにきけば春早やもかはづのこゑの立ちてゐにける
初蛙(はつかはづ)鳴くやいづらと窓あけて耳とめてをり月ののぼるに

§

春じめり馬頭(めづ)觀音の小夜ふけて立ちそめにけり田蛙(たかはづ)のこゑ
くくと啼きころころと繼ぐ蛙(かはづ)のこゑ纖(ほそ)き月夜のものとし聽きゐる

鐵兜

菜の花に眼のみうかがふ鐵兜童なりけり敵はあらぬに
爆彈三勇士を憶ふ
廟行鎭はきさらぎさむき薄月夜おどろしく三人(みたり)爆(は)ぜにたるはや

汲みかはす水盡きにけりいざとこそ立ちたりけむ思ひきはめぬ

鐵條網にいたりすなわち爆ぜ死なむ命なりひたひたとそろふ足音

ますらをや命ある間と口火燧り爆藥の筒はいたはりぬらむ

灼きつくす口火みじかしひた駈けに爆ぜて碎けて果てぬべき兵

ますらをはかねて期したれ行きいたり火と爆ぜにけり還る思はず

筑紫の我が不知火のおぎろなき氣性このごとし爆破し止んぬ

突擊路あへてひらくと爆藥筒いだき爆ぜにき粉雪ちる間に

薄月夜とどろ火の發つたちまちをおのれ爆ぜ飛び兵微塵なり

兵士はしかく死すべししかれども煙はれつつその影も無し

麻布第三聯隊

七年春、麻布第三聯隊の隊歌作成につきて、秩父宮殿下に再三拜謁し、歌詞成る。作曲は山田耕筰氏なり。軍歌としての新聲騰り、光榮身にあまる。その時の歌。

賜謁の日

秩父宮召したまふなりあなかしこ麻布第三聯隊に參るのぼる我は

早や早やと召したまふとよ我が足ども踏處さだまらず營門を今は

わが君は直立ちおはし御眼鏡にほほゑましけり此方見まして

最敬禮して眼がしらあつくなりにけりすがすがしとも若やかに坐す

麻布第三聯隊春まだ淺しうやうやと心ひきしまり高きにのぼる屋上展望

隊歌發表式の日

五月十六日、隊歌發表式あり。偶ま犬養首相の兇變の翌日なり。こ

の日參向、營内の道場にて擊劍の試合あり。我が椅子は一段と高きところにしつらへあり、中隊長宮に隣りまゐらせたり。あまりの畏こさに御後べに退りて扈從しまつる。

兵士(つはもの)はうやまひあつし竹刀(しなひ)とりお前にとうと聲徹(とほ)り擊つ
激しくうちあふ竹刀(しなひ)眼には入れこの畏(かし)こさに面も小手もわかず

營庭にて三聯隊の兵全部凹形に整列し、隊歌を合唱す。宮殿下もその列中にあらせらる。聯隊長と、作歌作曲の兩者は北面す。風やや強し、聯隊長の訓示の後、合唱の聲大いに騰る。

營庭の老木(おいき)の櫻過ぎにけりわれは立ちつくす光る眞土(まつち)に
立ち待つと心澄みゐる晝さなか兵あらはれて來り列竝(つらな)む
わが前に歩兵第三聯隊竝び立ち隊歌うたふと聲大いにあがる
葉ざくらは風やや強し耳とめて宮の御聲を聽きまつらくは

夜宴あり。將校一同列席。メーン・テーブルの中央に殿下おはし、我が席は殿下に對ひまゐらす。畏れ多きことかぎりなし。聯隊長には上海よりの凱旋將校對座し、山田耕筰氏その左に在り。わが作るところの隊歌、民謠「歩三の春」數次合唱され、少壯將校たちの氣焰亦當るべからず。この夜、無禮講とて御手づから御酒賜ることしきりなれば、初めはひたに恐懼しまつりたれども、後には陶然として、わが歌謠など御耳に入れ奉りぬ。

瓶子(へいじ)とらせ御酒(みき)はたぶなり御さかづき持つ手ふるへて泣きをりわれは
あなかしこ宮のお前に頸根(うなね)つきなんぞほのりと酒の乘り來る
この御酒(みき)や臣(おみ)もささげて醉ひにけりゆるしたばりて歌ひけりのどに

春の夜は闌(た)けにたらしもみさぶらひ遊ぶ今宵も闌(た)けにたらしも

我が歌

うちつけにただに胸うつ歌ならず心ひそめて我が歌は觀よ

命なりありのままなる觀のながめ祕密莊嚴(ひみつしやうごん)の相(すがた)しぞ思ふ

※・夕莢雲

苺咲く

いささかは庭の芝生のふちどりと苺のしろき早咲きの花

初夏の畑

麥の間(ま)に植ゑて肥やる茄子のうね麥は穗に立ち茄子の花はまだ

蠶豆の裏吹く白き晝の風ものの氣遠(けどほ)く夏はさみしさ

夏すでに穗麥にからむ晝貌の莟よぢれて花二つ三つ

玄土

このあたり田植おそし、馬は印旛沼地方の事果ててより借りて來るなり。この夏ことに遲れたり。

玄土(くろつち)は光とほらず物の根の下凍(したじみ)ふかし春來るなし

玄土のなじまぬ土の畑つもの季遲(とき)れたり白南風(しらばえ)を而も

玄土(くろつち)は眞土(まつち)ならねば水入れて深くぬめるなし早稻田(わさだ)根づかず

蛙鳴く草田のいきれたがやさず梅雨(つゆ)は向へど馬も借り來ず

玄土の小田よ十代田の栗の穂の光しらけてやをら代掻く
代掻きの眞夏來れり出でよ出でよとみに見えたり玄土のほけ

耕田遲る

まだ鋤かず狹田の田岸の鴨萱の根を泳ぎつつ蛙らはゐる
青日射しげき莠の下草に音は立ちにけり早き蟲の音

夏の田やいまだ鋤かねどぬめり田のむらさきの泥光りまされり
草ごみに荒く切りゆく田の土は犁の刃型の紫の塊

夜々、蛙を聽く

藁床に起きてなげけば蚊のこゑも立ちてゐにけりころろ夜蛙
樂しみと蛙聽く夜の水口は水も遊ぶか音ちよろろゆく

庭前小景

青梅の幹掻き立つる母の猫仔猫は飛べる蝶を見あげぬ
野茨はいとどしろきに層厚き薔薇は濡れて肉いろの花

鐵鉾雲

黃金の鐵鉾雲の巨き雲ただに押し騰り晝は久しさ
入日蔽ふ鐵鉾雲は雨雲の下ふらしたりすごく燒けつつ

§

眞東やただに反り立つ巨きなる鐵鉾雲は一つ根の雲
日のさかり鐵鉾雲の傍あがる神立雲のおどろ三つ峯

深大寺

立雲に雷こもる傍空風前しるしここのまつかぜ
黑南風にかがよふ群の青杉は嫩芽ふきたつ深大寺の森

夏すでに黝む青葉を揉みあふる梅雨の風ふかし押し移る雲

この庭や後ろ邃きに日はさして枇杷の喬木の明き實の數

閑かなる庵やと觀て仰ぐ眼にまろまろとよし明る枇杷の實庭に小亭あり

庭苔の強き日射を時隔かず散らひ舞ひ來る細き葉や何

花よりはこれの一木の鏡葉の照りかへし日を白しとを見る泰山木に花ひとつ殘れり

水冷やきここのお池のとちかがみ眺め足らはむ肘枕して

深大寺松風ひさしこの隱る黒南風はくらしけだし夜に入らむ

大葉栗しろくなだるる花群は深大寺出でて布田へ行く道

鳥居には一木栗の木花さはに穗に咲き垂れて代掻きの馬

梅雨にこもる

梅雨の靄おほに蒸し立つ日ざかりはくるしかりけり野に隱りつつ

けけと啼く夕闇蛙家垣の檜葉のしづくか食らふなるべし

食用蝦蟇

洗足池のほとり食用蛙を釣る浮浪者殖えたり、一匹の値五圓なりといふ。

池の下茅萱うちひたす出水には食用蝦蟇か夜ただ吼ゆらむ

池尻に食用蝦蟇を釣ると來てあはれあはれ空し人かがみをる

老蛙子蛙

老蛙子の蛙とし鳴くならし夏めきにけれやにほふ闇の田

老蛙田簑著て鳴く梅雨の田を子の蛙らは泳ぎすらむか

或る門前

むくろじは花ちりしける白土(しろつち)に雀鳴き立つ梅雨あけの照り

梅雨(つゆ)あがり代掻(しろか)きをへし水の田に新麥藁(あらむぎわら)の鳰が映れり

宵月

無線塔とわたる月のこなたには蛙が鳴きて植田すず風

敷藁や月夜清きに南瓜(かんぼちや)の黄なる花さへ照り白く見ゆ

地靄立つ蒼き月夜の草堤ひとりは行かず子ら二人ゆく

夜聲

梅雨霽(つゆばれ)のあをき月夜の白小雲遠く犬の聲のうつくしく發(た)つ

吾が窓よ月に開けば刈りしほの穗麥の矢羽根風そよぐなり

代掻(しろか)きて水も足らふや夜は蛙(かはづ)ころろ樂しめり玉ふくむこゑ

雷雲

黒南風(くろはえ)の風さき見れば雨雲に雷(らい)こもりつつ青き田のいろ

夏眞晝とどろ閃めき押し移る雷雲(らいうん)の層(さう)は拱居(あぐらゐ)て觀む

雨雲にやまずひびかふ物の音夜はまだふけず赤く濁る月

路上の照り

前歩む子らが頸根よ滴(た)り落つる玉の汗見ればよく灼(や)けにけり

搖りひびきしづけき山はよく聽けば分きしぐれつつみんみん蝉のこゑ

夕雲二景

あやに飛ぶ雲のうへ引くすぢ雲は夕光(ゆふかげ)にしてさらに氣遠(けどほ)さ

かぎろひの夕莢雲(ゆふさやぐも)は蜩(かなかな)の啼く間(ま)も早し邊(へ)に消(け)つつあり

紫芋

楯竝めて群立つ芋の高莖は紅すがし下透かしつつ

莖高の芋のひとつ葉風吹きてひるがへる見ればすべる白露

秋の風さわたる見れば高畑や幾畑となく芋の葉の群

芋莖や騒ぐ立葉の風傍も早や色づきぬ早穂田粳稻

朝曇うすらすずし水の邊はずゐき積みたりあかき芋莖

牛

日おもてにひた黒の牛立てりけり深くうなぶし見るとなき目見

道の幅俯居る牛の傍よけて歩み來にけりひた堪へむとす

§

風を見る牛のまなこのしづけさよ秋づきにけりうつくしき稻

ただに射す夕日や牛の横臥して瞼の蒼蠅しばたたきつつ

大黒の雄牛の尻毛巻きにけり夕風亂りほそぼそと見ゆ

艶黒の穩しき雄牛うなじ垂り日の夕かげは曳かれけるかも

この道に靜けき牛のありしかと還りゐにけりほそき月の夜

夜は起きて

ここの谷地冷えはなはだし夜は起きて月夜すがらに雲の行見ゆ

夜に起り荒く息づく風音はまがふべきなし耳を放たず

月の前おのれ消えつつ飛ぶ雲の後來たる間の空のすずしさ

山蟬か蓋し魂ぎる雲いでてただち梢にひた明る月

雲迅し月に逆らふしばしばも後夜はあはれに裏あかりして

大森區

本門寺

扁額は大虚庵光悦の書なりといふ

おほらかに本門寺とぞ讀まれたる日のくれぐれを仰ぎゐる我は

本門寺日の暮れかかる眞正面はひろびろとあり寒き石段

赤松はけだし閑けしつれづれと惣門を來てはひるこの庭

本門寺裏の切通しをどらいぶして松おほき山の寒きに向ふ

洗足の池

まかがやく日の位置低し空は觀て西かとも思へど南とも見ゆ

わが來り片附く水は池尻の築石垣のさむき夕波

蚋のむれ夕日にきほふしまらくは赤松の幹も暮れがたみあり

冬晴の夕日に照らふさざら波洗足の池は木のまより見む

池の面に沁みて光るは丘の家の硝子戸の冬の日の反射ならむ

ひたおもて水にかぎろふ夕光のひと幅の動き我にとぞ來る

み冬日や黒くあらはに短艇漕ぐ影二つありてかぎろふ夕波

この池や廣く明きに我は見てなにをかも憎む漕ぎゐる憎む

軍鷄

若冲の畫を觀て、心神相通ずるものあり、乃ち我も亦、

この軍鷄の勢へる見れば頸毛さへ逆羽はらげり風に立つ軍鷄

雄の軍鷄は丈いさぎよし肩痩せて立ちそびえたり光る眼の稜

冬の土に昂然として立つ軍鷄の鷄冠火のごとし流るる頸羽根

一羽ゐれば胸高軍鷄の雄の鷄も後向けりけりはらめく尾の羽根

軍鷄の立しづかよと見れ蹈むただち蹴爪くひ入る霜ばしらの土

※・父母の冬

鶉飼

わが父はつれづれの翁、鶉飼ひひめもす飽かず、鶉籠雌と雄とさし
寄せ、行き通へよく番へとぞ、い坐ると、膝に肘張り、眼を凝らし、
ただにおはせり。眞白髯かき垂る老の、この姿ひと日もおちず、生
めよ殖えよよく番へとぞ、日あたりを冬はよろしみ、端居ますかも。

同じく

摺餌掻きただにみ冬を家ごもり番ふ鶉を見て守らすなり
ま寂しき父と思はめや日あたりを鶉見守りひたぶるに坐す
み冬日は愛し鶉ものどならず行きはかよへどよくは番はず
とまり木の捲毛カナリヤ聲搖らず冬をこごえて眼はあけてをり
おもほえず父の薄眼のたどたどに日月も知らずなりまさむとき

信心

わが父は信心の翁、み目ざめはあかつき闇、口嗽ぎただち拝み、珠
數かぞへ南無妙法蓮華經、かがなべて朝に五千、午過ぎて夕かけて
三千、湯を浴み、御燈明點け、殘りの二千、一萬遍唱へつづけて、
眞正しくひと日もおちず、國のため、祖先のため、その子らがため、
わけても子らの子がため、ただ唱へ南無妙法蓮華經、いとほしと口
には宣らね、嚴かしさまたただならね、ひたぶるのこの親ごころ、
その子我、仰ぎまつりて泣かざらめやも。

同じく

日をひと日夜も乞ひ祷みひたごころ守らす我等が父ここに坐す
愛兒我などかたゆまむこの父の夜もおちず通ふ御聲とほれり
わが歌はわがものならず祖先神くだし幸ふ言靈の搖り
父のこゑ澄みぬる際やうつばりの塵ひとつだに聽きものがさず
魂むすび父とその子の相合へば言には搖らねただにかなしさ
ほのぼのとおはしませばか尊くてこの頃父の老のよろしさ

宵寢

わが父は八十ちかき爺、國いでてすでに二十とせ、この頃は夢に立

ち來と、亡き友の夜ごと寄り來と、樂しよとひと夜もおちず、よく寢むと衾かつぎて、今宵はも何の誰か來む、早や待つと、すぐに寢ましぬ、友無しにして。

たけ高き母

わが母はたけ高き母、まさやけくさびしき母。おもてだち學びまさねど、僞らず、正しくましけり。み眼清く切長くます。やさしきは夫にのみかは、その子らに、その子の子らに、なべて愛しく白髪づく母。

わが母

わが母はシゲ子、石井氏、肥後南關はその里なり。

母の國墨磨川の水上の山の井近くしだるゆづり葉

わが母や學びまさねど山水のおのづからにし響きたまへり

わが母はこころ隈なしまさやかに御眼明らけく切長くます

わが母はあてに清明し山の井の塵ひとつだにとどめたまはず

わが母はよにいさぎよし高山とたとへて言はば雪割の花

手習ひ

わが母はつれづれの嫗、永き日を子らが名書くと、手習らふと、たどたどし筆と墨や、その文字は父に習ひて、隆吉・鐵雄・家子・義雄と、その子らが名。愛し母この母思へば、赤石の硯の海のふかさ戀しも。

老の賀宴

昭和七年十一月五日、父の喜壽と、母との金婚式を祝ひて、一門その膝下に集る。

1

かがなべて老の齡のたふとさよ七十路あまりいよよ七歳

よき翁父の寂びたる老樂は市中ながら山の手の松

こきなでてゆたけき父のましろ髯いや掻き垂らせその膝までに

おもほゆれ相者ならずも我が父のみ命は長く豐に寂びつつ

2

金婚の父と母とを言祝ぐと子ら擧り來てつどふよろこび

金屏の灯映見れば父と母竝びおはしていよよたふとさ

父に添ふ母の今宵の影見れば永くも添ひて舊り來ましけり

よき翁よき嫗としうち竝び笑ますこの夜のあてにをさなさ

父と母竝びいましてしづけさよ七十路越えて二柱なほも

うちそろひて老づく子らを父と母世にますことのありがたく泣かゆ

童より四十路五十路と父母を仰ぎ來しもの正眼かなしく

わが母のいまだあえかにましまして父のみもとのぼんたんの花庭にありき

嘖ばえて

わが父はさびしきひと、富み富みて失ひしひと、傲りかに育ちふるまひ、五十路過ぎよ、郷を離れて、年老ゆと、心弱ると、すべなみと子らに頼らしぬ。この父ぞこの日を、子の我と酒めせばか、秀に出る荒み靈。思はぬにうち勢ひ嘖ばしにけり。嚴かしき昔の父、おもかげに今し立ち、潔しわが父やげに、昭和八年一月元旦、父の子は我は、嘖ばえて涙しながる。

§

童ぞとまだおぼせれか一聲に喝とぞ嘖ばす白き髯の父

言過ぎて嘖ばえにけり何ぞかく父の尊のおそろしきや我に

嘖ばえてまかり還ると夜は寒しこの元日の星の照りはも

嘖ばえて父と思へばいさぎよしよくこそ強く生きたまひけれ

老樂

父と母性合はず、さびしくましき。若きより悲しかりにき。今老い

て、七十路過ぎて、さらさらに何の事なし。頼りなく頼りますかも、まさびしく閑けかるかも。朝に夜に、茶のけむりほのぼのと立てて、在り對ひ坐す、これの老樂。

冬の日

老らくのながき朝夜のわびごころただに對はし寒きこの頃

父と母冬は南の日あたりをただによろしみ常二階に坐す

※・月の魚眼

霜に行く

上乾くもろき地膚や立つ霜の光る柱はさくりさくり踏む

朝北風を帽ひきかぶり出あるくと松原越えて寒しいよいよ

卓上燈

反射燈更闌けにけり我と在る球面の影の冬はきびしさ

煙筒に風の吹き入る音きけば雪解はいたも騒がしくあり

梅に寄せて

昭和八年二月二十七日の夜、與謝野寛先生の還暦祝賀會を東京會館に開く。その折、梅に因みて獻げたる歌十首、但し各人同題なり。

讃へ言うち擧げむよはまのあたり今日をさやけき白梅の花

久地梅林の梅に

君がため未明に起きて梅のはな見に來りけりまさやけき花

來り見て涙しづかなり梅のはなかくはこもらふ靄にこの花

白くのみ光こもらふ梅のはな松の木群ぞうちかすみたれ

晝の靄うちへだて見れば梅のはな紫ふかき枝に照り交ふ

咲きにほふ老木の梅こぼれ日は花おほきからにうつくしき影

再び梅に寄せて

よき人の道のあゆみはとどまらず白梅の陰を入りて出たまふ

梅の花にほふ南のゆふがすみほのかに老にいたりたまへり

ぬくみ

日のあたりなにとなけれど春もやや立枯草の叢根かがよふ

ほのぬくみ明る眞土や追ひぬけて鼠見はなち猫のころぶす

水邊早春

葦かびの角ぐむ見ればあさみどりいまだかなしき宇麻志阿斯訶備比古遲神

春はまだ寒き水曲を行きありく白鷺の脚のほそくかしこさ

蛙子の生るる頃

春早き田の面の水皺風吹けば流るるがごとく動きつつ見ゆ

春いまだ蓽のたまごも田川には水泥かぶりぬ搖りうごく紐

紐解くる蓽のたまごにくろぐろと今はしみみにはずむものあり

ほかならぬ子らを思へばかへる子もしじに生れつつ水に搖れ出ぬ

かへる子ぞ繁に生れたれこの水を親のかへるの影ひとつ無し

初蛙

四月五日夜、ラヂオのニュースは米國の大航空船アクロン號の墜落

を報ず。

雷とどろき裂くるすなはち天翔(あまがけ)るアクロン號はほろびたりけり

アクロン號とどろほろぶとも夜に聽きてころろうつくしき田蛙(たかはづ)のこゑ

耳聰(さと)き子らかなやあはれ夜に聽きて蛙啼(かはづ)くころろと啼くよと聽きをる

木の芽立(めだち)かをす雨間(あま)の夜ごもりに蛙(かはづ)は啼きぬまだくくみつつ

冬を眠り春は起き出(づ)る田の室(むろ)のぬめり蛙(かはづ)か覺めつつあるらし

遲日

田川にも蟇(ひき)の子滿ちぬいざ子供卯月八日(やうか)の花菜摘み來な

このゆふべたとへしもなくしづかなり日は明らかに月を照らしぬ

春朝

ある朝、縁側の姿見の卓に花瓶を置きて海棠を※したるに、鶯の來てとまりたれば

春はいまけむる小雨(こさめ)のものならし鏡にこもるうぐひすのこゑ

濕り田

濕(しめ)り田(だ)よ春は田の面(も)の下萌(したもえ)に油ながれて日ぞ光りたる

投げ棄てを蕪(かぶら)花咲くここの田の見のあたたかやまろき根蕪(ねかぶら)

麥秋の頃

蟇のこゑ野天(のてん)にひびく午(ひる)ちかく焦(こげ)いろの風も麥あふり吹く

熟麥の大麥の穗を照りつくる六月の日射くらきがごとし

刈しほの濃きは淡きは大麥と小麥にかあらむ裸麥もあらむ

焦いろの盆地の麥に立つ靄の夕あかりながく蒸しにけるかな

風おもていとどかぎろふここの野は麥ほこり立ちて言ふばかりなし

§

白南風の軍用道路はてもなし竝び押し來るカキ色の兵

麥の秋目も病ましかもとどろ來る戰車かぎろひ砲つづく見ゆ

亂れ立つ電柱見れば黃の麥や段畑の上にあがる白雲

立雲よ野外教練の子ら行くと銃はかつぎて足亂れ踏む

熟麥や月夜ひさしき砂利路をもそろ這ひ入る大き蝦蟇あり

草堤にて

人ゆかぬ荒玉水道草ふかし音に老けにけり隣田の蟇

あさみどり標ゆひそめし早苗田の苗間の田水のりにけるかな

蛙を聽く

草ごみに鋤きしばかりをる水の蛙にはよき雨ふりにけり

地にひびきしげき蛙を夜ごもりに觸りてゐにけり耳に蛙を

田の蛙怪しくしづもる時たちて音亨りけり深き夜の地震

田に滿ちてしげき蛙はよく聽けば子らが小床に呼び鳴くごとし

草堤子らと歩きてこちごちに聽ける蛙か夜もすがら鳴く

くくみ鳴く蟇のこゑきけば草ごもり夜の眼光らす田の水が見ゆ

ひとつゐる濁聲蛙泥の面のうすら上水も夜ふけつらむか

ナチスは書を焚きにけりかはづ聽くこの夜深にしひびかふものあり

竹若葉のころ

あさみどりよにもすずしき一色は竹の若葉のひらきかけの頃

幾群と竹の若葉は萌えそめてこなたなぞへの馬鈴薯の花

草堤白日吟

草堤空梅雨ひさし子らと行き妻と行きつつせつなくおもほゆ

篁子や黒き女童草間ゆく腕も脛もよく灼けにけり

青萱原尿放つとこの男の子父と竝ぶか早やいさぎよし

爆音密雲にとどろけりあはれあはれ草いきれしるき中より仰ぐ

息ごもり風は流れずこの妻と夜に見し草の深きに見入る

雲は蒸す

夏霞おほに蒸し立つ野平をふきあがる雲ぞ低くかがやく

白 光の蒸しつつこもる空にして雲の奥渡る黝き鳥あり

白き襞けぶかき雲を彌が上に雲は噴きあがりまかがやく縁

§

蒸しにけり白き南風を月かとも氣球うかびて夕あかり空

六月七日淺宵

川端千枝女史告別式の夕、通知入手遲れ不參。

圓けくて肉いろの月おぼろなり白南風あけの茅蜩のこゑ

身をつくす炎なりけむか老いつつあはれ激しくぞ戀したりてふ

夕かげを月は光らず眼前や電線の張りをはなれつつあり

村藪はまだ暮れがてぬ靄ながら月高くのぼりけんけら棒の音

無線塔相對ひ立ち夕凪なり暮れやらぬかなや月ものぼるに

雨夜雲噴き出づる月の角見えて鋭かりけりかなしき光

§

藤の棚に雨の音しげくなりにけり光りたりしかさきほどの月は

積亂雲

積亂雲とどろ噴き立つ日のさかり人參の花に我は思はむ

眞平と根に湧きあがる巨き雲鐵鉾雲ぞ吹き亂れたる

庭前小情

七月二日

電柱と支柱が近き眞日照りは諸葉しなへて酸き豐後梅

立雲の怪しくかがやく日のさなか蟷螂が番ひ雌は雄を啖ふ

下草を而も日照りに眼を射るは山百合のしろき裂長の花

よく光る百合の花瓣や一莖に花は二つひらき照り合ふその影

頸長の鐵砲百合は日に向くと鉢ごとに白く突き出すがしさ

立莖のしろく粉ふく竹煮ぐさ廣葉わき立ち穗には數花

山椒の葉摘みつくしける庭に出て空梅雨のあけをしみじみ感ず

藤の棚蔽ひあまれる藤の葉のそよぐ影見れば照り透く葉もあり

七月八日夜、即興

大きタオル黒き裸身に卷きつけ來る女童篁子そだたきやらむ

母を虐ぐるこの男の子よしつくづくと父ははばかるをこの子は成しぬ

夜明けに白馬ヶ嶽へ出で向ふこの子と思へばうやうやし母と

驟雨、即興

葉洩れ日をただにすずしと下草に見つめゐにけりそよぐ光を

張つよき山百合の蕾うちたたく驟雨なりただち霧たちのぼる

深き酒せちにつつしむこの頃は脾腹にひびくなにものもなし

すばらしき雨あしの長さ岡の上の林より盆地の青田へ走る

豪雨とみにおとろへて金蓮花の濡色あかし蟹のごとうごく

吾が子らを心に思へば神立雲光り閃めきぬはたためくは後

よく冷やして冷やき麥酒はたたき走る驟雨のあとに一氣に飲むべし

たちまちにして歌成るこのよろこびを妻に言擧げて我がくちつけぬ

或る朝涼

共産主義者轉向すと聞くこのあした白鷺ら飛べり青き水田のうへ

晩夏小情

照りつづく夏もいぬるか肉厚く雲うかびいでて今日も蒸したる

襞ふかく光こもらふ黄金雲蒸すからに巨き二つ牡丹花

いまだ夏布團の綿は日に干して雲よりも白く光りたりけり

日のひかり強きさなかを黄の泡のほのぼのと立つをみなへしの花

切石にうづくむ猫のねちねちと腋毛つくろふをみなへしの花

ひたむきに閑けかりけり日の方や向日葵の蘂ぞ灼けつくしたる

花いろのなにかうち透く雲ゐに立つ秋風もうすら涼しさ

向日葵や葉裏にさがる紋白蝶の夜は翅ばたかず宿りたりけり

庭前立秋

風前に朝居るしろき積雲の下空あをみ今朝はすずしさ

無線塔うつろふ雲の騒立てば眼にとめて涼し秋來りけり

油熬る蝉の鋭聲は繁ながら立秋を今日を涼しくおもほゆ

垣くぐる尾長の猫の子を連れてほそり目に立つ桔梗の花

互生葉の樗の瑞枝風立ちてその涼しさはかぎりなく見ゆ

藤の葉にとほる日ざしのすずしきは樗の葉分く風そよぐなり

ひらひらと風に吹かるる黄の揚羽蝶立秋も今日は二日過ぎたり

電柱に裏吹かれゐる蝉の翅の飛び立つと見れば鋭聲斷れたり

白緑

晝さなか駈足の兵續きゐてキヤベツ畠の白緑(しろみどり)の風

白みどりよく植ゑ竝(な)めし葱の秀(ほ)を蜻蛉(あきつ)は飛べり迅(はや)きその翅(はね)

或る夕光

角畑(すみばた)や茗荷にあかる西の日の黄にかなしければ我は觀るなり

木下道(こしたみち)夕日さし入り流れたり亂れ立つ蝶の何に驚く

向日葵童子

わが庭の向日葵つひに伸びず、一列にして小さし。童子のごときそのさまや。

丈(たけ)ひくき向日葵童子(ひまはりどうじ)うちならび直(ただ)に射(さ)す日に面(おも)あげて佇(た)つ

日に向ふ向日葵童子前なるがいといと小(ち)さし面直(おもてただ)にあげぬ

ある午

日のさかり草堤來る聲はしてよく聽きてゐれば我が名指(さ)しをる

我が家(や)言ふ行きずり人の聲高(こわだか)をひそみゐにけり暑き日なかを

十六夜

照りいづる月は魚眼(ぎょがん)のごとくなり吹きながす雲よしろき水脈(みを)だち

照り強し月の面(おもて)を撲(う)つ雲の眼には裏べを立ちのぼりつつ

月夜なり低くかぐろき丘の脊をふきあがる雲ぞ絶えずかがやく

芋の葉の聚落を見れば月夜には面(おもて)照りあかり人ら立つかに

草土手や月にそがひてゆく我の影がひとりなり袖をふりをる

垂りくらき孟宗の上に在る月の十六夜の光風にはらく

ちよろろと光る水あり草深に田をめぐり來て月の夜愛し旱天にて田は植ゑずじまひになりぬ

地下水の響くをきけば月かげや鋼管の蓋に聚まり光れり

風道の光すがしき鴨萱は月前に見て跳ぶべかりけり

狹霧立つ窪田のわきの草土手も月夜ふけたり竹※草の花

うちかがむ毛の柔ものの黒きかげ葱はかがよふ月夜落窪

十七夜

照りつよく孟宗の上に立つ光十七夜の月にわれは正面向く

十七夜の月かすめ飛ぶ雲さへや立つ秋風と繁にし白し

稻びかりしきりひらめく棚雲の上の空晴れて秋は來にけり

旱天夜も火氣だちていちじるき横雲の上に蠍座が見ゆ

十七夜の月惜みをればおどろしくしろき巨き雲の亂れ立ち蔽ふ

八月淺宵

藤の蔓網戸の外にうちそよぎ灯かげ緑なり夜は透かしつつ

蝗麿網戸にとまり涼しさよ灯さしむけて我ら夕餉食す

宵の灯を網戸にたかる蟲の翅の螺鈿きらきらし鏤めにけり

粉をちらして網戸に翅うつ天蛾は肉厚き胴の黝き褐色

灯にあかるみどりの網戸男童が蟲を採る顔の外に凛々しさ

黄金蟲

野に向ふ我が家の網戸灯の點けばさうさうとして羽蟲來襲ふ

黄金蟲うなり飛び來るこの夜ごろ雲は蒸しかへし夕凪暑し

黄金蟲網戸うちたたく音きけばすさまじきかなや灯に狂ひける

黄金蟲銃丸と來て亂れふりこの朝見ればなべて死ににけり

黄金蟲朝なさな掃き亡骸の艶ふかきから瓶につめつつ

晝寢覺

晝寢ざめ日の照る方にうち見やる往還の埃とほくひもじさ

晝寢ざめまだうつつなしながめゐてしらしら照りのをとこへしの花

晩夏白雨

いつしかと夏も去ぬらしこの眞晝雨はげしけれど遠空あをし

白雨の霧立ちのぼるゆふつかた孟宗むらは燈火早し

白日觀雲

我が家は坐ながらにして觀る雲の空廣らなり野のかぎり見ゆ

坐ながらに雲の行觀る晝つかたみんなみの空にかかる鷺あり

押し移りうしろ風もつ綿雲のおのれ薄れていつかむなしさ

吹くからにつぎつぎと來る白雲のおのづからゆたに移る風向

風向に移ろふ雲のまろがりは光厚うしてしろき二塊

曇の雲いづら行きけむ今見ればさまかはる雲の高う積みたる

仰向きに眠る顔だち胸高く押し流れ行く雲もありにけり

樂しみと雲は眺むる夕かげを茅蜩のこゑの亂れ立ちつつ

曇り日

曇り空日暮もよほす雨のまを茅蜩のこゑの立ちきそふめり

雨ふり雲立ち蔽ふ森のこなた野良家組み明ししきり音立つ

寢室の初秋

二階より灯に照らしみる向日葵の花小さうして數無かりけり

硝子戸に白き寢臺の影うつり灯もうつるなり子らが初秋

蚊帳を吊る妻が袂は寢たる子の直向ふ顔に觸りにつつあり

水のごと白き寝臺の下冷えていの寢(ね)ざるらし子らが圓(つぶ)ら眼(め)

蟲の音のほそきこの夜と思ふにぞあはれ一杯(ひとつき)の水すすりをる

秋旱

眞晝ひとり歩み來にける砂利の道に夏枯れの田の風を見わたす

秋旱(あきひでり)防空演習しきりなり蒸(む)れつくしける稗(ひえ)の雉子いろ

何に立つ水の音ならむ思はぬを旱はげしき眞晝にきこゆ

木犀

夜のくだち小雨しづみてにほひ來る金木犀にうらなづみゐる

遠じろき夜

月の夜は雲遠じろし野平(のだひら)を多摩川あたり森低み見ゆ

月夜いまなにか明りて來る聲の隣びとらし通り過ぎをり

我家を

晝の野に子らと出て來てかへり見る我家(わがや)にしあれや白木槿(しろむくげ)の花

野に見つつ閑(しづ)かなりける我家(わがいへ)や上のてすりに毛布干したる

秋の日

秋の田の早稻田(わさだ)の畔(くろ)をゆく童(わらべ)ふたり見えつつ彼方(あなた)指しをる

事もなき秋の眞晝や穗に垂りて早穗田(さほだ)の美稻(をしね)色づきにけり

眺めつつ閑(しづ)けかるかな夏過ぎておほかたの色は秋に入りたり

田のあなた新墾道(にひばりみち)の砂利道も閑(しづ)けかりけり秋正午(あきまひる)過ぎ

穗の薄光(すすき)るあたりに眼は向けて何かをさなき聲も聽きをり

根くづ焚く

根くづ焚く火は燃えながら掻きほけて土ばかりなる何も無き畑

根ぐづたく畠の火立色見えてうちいぶる末はしろく棚曳く

床の間

きちかうの表見せたる花ふたつ薄とりそへ妻がたしなみ

赤人のゆたに坐らす像見ればほれぼれとよし眺めたまへり

ピアノ

月拂ひ二十ヶ月とよ。このピアノ中古ぞとよ。塗りみがき、うつくし黒し、大きなり室にそびやぐ。かうがうしこのピアノ、立ち添ひて、蹲み見て、蓋をひらき、鍵たたき見て、見も飽かず終日ありける。貧しかる我やとも、えは求め得ず、常こがれ果敢なみしもの、子らが爲め、五十路近く、やうやうと手に入りにけり。月拂ひ二十ヶ月とよ。中古の獨逸製とよ、眼がしらのあつくなり來る。

§

父われはピアノの陰にかき坐り言默しをり子らぞたたける

在るべくて在るべかりにしこのピアノやうやうにして室に光りぬ

演習の秋

秋まひる野には火花の發つ見えて機關銃の音のたたたとひびけり

赤き旗稗の穗向にしきり振りとどとかなしも駈けきたる兵

秋の日の空氣ほがらに駈けのぼる兵あらはなり淨水場の道

假想敵ひたにし晝をこもらべば孟宗むらもかなしかるべし

うち透り休戰喇叭鳴れりけりこちごちの野も吹きつぎてあはれ

庭前秋雨

楚立つ古木の梅にふる雨のあかつきの雨の寒くしぶけり

朝寒と小雨ながらふこの空や立枝の楚さ青に見えつつ

いち早く諸葉ふるひし梅が枝に雀がとまり雨のコスモス

黄の粟のいとど蒸したる女郎花も時過ぎにけり雨しげくふり

朝ぐもりラヂオの塔の先わたる小鳥かぎりなしなだれ落ちゆく

或る夜の雨

誘蛾燈しろくかかぐる家のあたり秋雨の中になにか狂へる

鈴の音の草堤來る夜の雨間灯をあかくつけて胸とどろ居る何の號外ぞや

燈火管制の夜

ラヂオ研究所灯を消しにけりうしろ立つ照明迅く鐵塔は見ゆ

大藏の原目にただひとつ頼む灯の明かりしかば遂に消しにけり

常の夜も谷地は暗きに灯を消して物のこごしくいよよけぶかさ

ここの谷灯かげ全く無し消し棄てにふたたびと點けずいねにたるらし

砧村燈火管制の時過ぎて月明らけし高槻がうへに

隈ふかく過がふ夜霧を照る月のいよよさやかに高しらしつつ

ふかき霧しきりむらだつ夜あけがた月は黒檜のあたま照らしぬ

早や早やとあかつきの闇にしぐれゐる蝉のこゑごゑもをはりに近し

山茶花咲く

書齋より觀て

玻璃戸透き山茶花あかく見えにけり咲きにけるかと眺めつつ今朝は

株まろき細葉つつじの霜凍にここだくづれしさざんくわの花

葉牡丹の庭

ある朝、妻と出てあるくに、とある畠に、葉牡丹の植ゑはなしになりたるが、數多ければ殊にあはれなりき。一株はいかほどと訊けば十錢にてよからむと言ふ。さば買はむとて三十株ほどあがなふ。冬は花も無く、色も無き庭なればすべてよろしく移し植ゑて樂しむ。かほどの喜びまたとあらむや。我は足るなり。

葉牡丹よ大き葉牡丹、葉牡丹を一株植ゑ、二株植ゑ、移し植ゑ七株八株、また更に十よここだく。畠より根こじあがなひ、リヤカーに山ほども積みもて來さしつ。彈き葉のあさみどりなる、内紅く紫くろき、層厚く七重八重なる、葉牡丹は大いにうれし。牡丹とも見ずや葉牡丹、値は廉きその株ながら、株立つとこの庭も狹に、豐かなり乏しともなし。我が植ゑて霜に傲れり。いかならむ雪の日や將た。この富よこれの葉牡丹、子らとこそ見め。

§

葉牡丹の冬によろしき株立は紫ふかし葉をかさねつつ

妻よ子よわれら富みたり置き足らふ葉牡丹の霜にわれら富みたり

野鴨

さる人より贈られたる野鴨の一夜にして二羽ともあへなくなりぬ。その歌。

灯映や家の夜寒をつくづくとうづくむ鴨の竝びみじろぐ

三和土の凍きびしかも夫鳥の雄鴨死にせり雌の鴨もいづれ

童言ふ雌鴨かなしもこれをかも長々し夜をひとりかも寢む

朝明待たず終夜うづくみ死鳥の雄鴨がそばに雌鴨斃れぬ

下總や千葉の水沼になげかひし愛し野鴨を家に死なしつ

霜晴

大野良の一夜の霜の下り到り見る眼まばゆき冬は菜のいろ

大霜のひと朝のいろを我は見て夜をとほし來し今ぞおどろく

宵早く寢ねにたりける今朝起きて子らが駈けいづる畠の大霜

鷄のこゑうらめづらしとあらなくに大霜の今朝の野は澄みにける

日の出前霜はふかきをくろぐろと人立てり見ゆ浄水池の土手

霜晴をおほに燃え立つ丘の靄ひむがしの空は日ののぼるなり

§

霜晴の靄の氣に立つくぬぎ原午ちかき日の今はあたりぬ

日あたりの枯葉のくぬぎはららかず霜晴の午の靄のしづけさ

にびねずみ雑木のすがれうちけぶる霜の氣にして晝はあたたか

靄の奥ふかくかがよふむらがりは櫟枯葉か乾ききりたる

しづけさたとふべきなしくぬぎ原にあはれかがやかし一葉ちりをる

赤松の木群しづけくありにけり日のあたるところ影を落して

日あたりの枯野よこぎる道あらし思はぬにしろきバスの揺れ來る

思ふことみなしづかなり妻とゐて冬の日向の靄にこもらふ

冬雑木の靄あたたかき遠ながめ鉾杉の秀も群れてこもれり

霜晴の日あたりぬくむ野の南ラヂオの塔はうち對ひ見ゆ

日の大皇子

皇太子御生誕を壽き奉る歌

その前日

冬の晴無線の塔のいただきに水晶のごと光るものあり

御生れの日

霜晴のひむがしの空光立ちゆららに紅き大き日の面

皇子ぞ今御生れましたれ日の出疾くサイレンはつづくまさに大皇子

國をこぞり極まる涙しづかなりかかるよき日を待ちまけまつりき

乞ひ祷むと言絶えにける國民のいかなるきはか涙ならざらむ

何ごとも畏かりけりこの朝や大きみ光に息づく思へば

皇神も見霽るかします青雲を今朝ぞうち開く此の産御聲

産御聲玉と透らす此の國や早やうら安し勢ひこそ思へ

その後

ラヂオの我が祝歌はいち早し子らが歌ふこゑのひびき來ここに

畏きあたりを

朝光の貴く明き御産殿に國母は坐さめ御眼なごやかに

現つ神我が大君は朝に夜に通ひわたらすと皇子を笑ますと

大君の御笑ひ思へば朝ぼらけ日はさしのぼり豐の旗雲

再び、大皇子を

生れましてたぐひなく坐す此の皇子の我が大皇子ぞただち日嗣の宮

朝よ夜よ肥立ちましまし我等が皇子あてにをさなく笑ますとふはや

繼宮明らにゆたに坐せりとぞ畏みて聞けば御息づかひまで

月と星

昭和八年十二月廿日夜、上弦の月を中心に金星と土星と潛入す。數萬年に一度の歡會なりといふ。金星潛入、タツチ午後四時三分四十八秒、完全潛入四時四分八秒、出現雲のために不明。土星潛入、タツチ午後六時三分十六秒。完全潛入六時三分三十六秒、同出現七時一分、完全出現七時一分廿秒。

上弦を食み出る圓き陰の月夜空は青し冴えかへりつつ

纖月の縁どる黒き圓球は我が佇つ地の陰うつるらし

現しくもいたもかなしきこの淺夜月にふたつの星潛り入る

金星は下潛りつつ月の上に土星は明し光りつつ入る

月面をゑぐりてくらき色見れば裏ゆく星のありと思へなくに

母と子ら佇ちてながむる西の方月も二つの星を抱きぬ

巻末記

本集『白南風』は、我が第六の歌集たるべきものである。

第一は『桐の花』、第二は『雲母集』、第三は『雀の卵』であるが、第四、第五たるべき歌集は未整理の儘に、此の第六の集を刊行することになつた。で、此の『白南風』は大正十年の『雀の卵』以來、約十三年ぶりの出版であるが、順位としては、間に二卷のエアポケツトがあり、直後の歌風ではない。

尤も、その間に、詩集としては長歌の多くを收めた『觀想の秋』、長歌の綜合集『篁』及び短歌の選集『花樫』或は現代短歌全集中の『北原白秋集』等の刊行があり、『白秋全集』の歌集第二にも新作の一部は編入されてあるが、何れも單行の新作集でなかつた。これは別編たるべきものである。

『雀の卵』以來、現在に到る、わたくしの短歌作品は約四千首にのぼり、長歌は六十に餘るであらう。若し分册整理するとすれば、左の四卷となる。

第四。大正十一年より同十五年に至る作品中、小田原山莊生活を中心としたる短歌及長歌、加之、同傾向の若干の羈旅歌。及增補新作。

第五。大正十二年より昭和二年に至る作品の中、羈旅を主としたる印旛沼、北信、鹽原、樺太、北海等の短歌・長歌・口語歌。及新作增補。

第六。大正十五年より昭和八年に至る作品の中、天王寺墓畔、馬込緑ヶ丘、世田ヶ谷若林、砧村、此の四ヶ所に於ける、東京轉住以來の生活を主としたる短歌及長歌。

第七。昭和二年より同八年に至る作品の中、木曾川、北越、奈良、北九州、滿洲、濱名、富士五湖等の羈旅、飛行等の短歌・長歌及增補。加之、今後の新作羈旅歌。

而して、本集『白南風』はその第六に該當する。なほ、此の外に時事歌として、昭和八年度に『成城學園を思ふ歌』百四十四首及び二三の長歌があるが、之等は他の機會に何かの集に編入されるであらう。

以上の四卷は、その製作順によらず、各册各自の風懷と香色とを個々に收攬しようとするものである。で、製作の年代は交々に錯綜してゐる。

之等の内、第六を先にした理由は、最近作が多く、整理に就き易かつたからである。第四、第五の如きは、その推敲が十三年に亙つて、而も完成し得ぬ作の夥多があり、一首の中、僅かに一二音の爲に難澁する若干もあつて、之等の整理は容易ではないのである。その當初、まだ生れてもゐなかつた長男が、既に小學を卒へて中學へ

進む現在に於て、つくづくと感慨の深いものがある。その間、一册の單行歌集をも完全に整理し得なかつたわたくしであつた。ただに切抜の誌面やノートが眞黒になるばかりであつた。

§

本集『白南風』の作品數は左の通りである。

天王寺墓畔吟	短歌貳百五拾貳首・長歌壹篇
緑ヶ丘新唱	短歌貳百貳拾壹首・長歌貳篇
世田ヶ谷風塵抄	短歌貳百貳拾五首・長歌壹篇
砧村雜唱	短歌六百貳拾壹首・長歌拾篇
總計	短歌壹千參百拾九首
	長歌　拾四篇

生活年代は大正十五年暮春より昭和八年の年末に至り、製作年代は、大正十五年七月より昭和九年二月に至る、約七ヶ年半に及んでゐる。

編纂に就いては、その製作の年代順によらず、生活の次第に順じた。乃ち居の移るに從つて四章に分類し、之に應じてそれぞれに秩序を正した。前後するに必ずしも作の新舊を問はなかつた。此の際、増補すべきは加へた。一貫した整理を欲したのと、更に新なる感興を得て、意外の多作を見たのである。

本集の編纂を思ひ立つたのは、昭和八年の初頭であつたが、その後、曾つての生活に於ける歌材の整理に於ける熱意が、わたくしをして六百首に庶い新作を得せしめ、またノートに探し索めて、未成の物をも訂正、採録せしめるに到つた。豫定以上の尨大なる歌集となつたのは此の故である。

又、その作品の收録に就いても、本集は先例に反して極めて寛選である。嘗つての發表作の中、殆どは棄てず、先に述べた如く新作以外のノートの分までも加へた。ただ一首一首には丹念した。

整理を了したのは、昨八年の十一月であつた。初校のゲラ刷りが直ちに出た。而も最後の下版は本年の二月にかかつてからであつた。此の間、訂正に訂正が重ねられた。下版後紙型にまで、わたくしの不滿が夥しい象眼や組み替を強行せしめることになつた。冷汗を覺えるぐらゐではなかつた。この難行には脊骨もひしがれる思がするが、推敲の苦も決して矜るべきではないのである。ただ徹すべきは飽迄も徹しなければならぬ。いい加減のところで放擲すべきではない。

その當時の作に對し、増補した新作の割合は、『天王寺墓畔吟』に於て、三・六倍、『緑ヶ丘新唱』に於て、四・五倍、『世田ヶ谷風塵抄』に於て一・八倍、『砧村雜唱』に於て、〇・二倍となつてゐる。

此の内、最も舊い作は『天王寺墓畔吟』中の巻頭、「新居」の一、「白藤」の歌であり、最も新らしい作は『砧村雜唱』中の「※・父母の冬」の一聯である。

他の全篇に亙る一々の作の新舊、製作の年代に就いては、事あまりに繁瑣に亙るので茲には冗説せぬ。確實なる年表その他は後日に

譲ることにする。

§

本集には四つの風景がある。時に應じて、それぞれにわたくしの生活の環境が移つてゐる。四つの章の冒頭に、簡單な解説は試みたが、更に多少の加筆が必要に思ふ。

天王寺墓畔

大正十五年五月に、わたくしは小田原の山莊から、その谷中の天王寺墓畔に移つた。河口慧海師の紹介で借りたその家は石井久太郎氏の有であつて、元は天王寺の坊中の隱居所の一つであつたらしい。廂が深く、晝もなほ仄暗いほどであつた。門は東に面し、道路を距てて直ちに石塔と向ひ、隣は左に彫刻家朝倉文夫氏のアトリエがあり、右には珠數工の板廂が門庭の木蓮の上に見えた。その門庭には楓や百日紅、竹柏、檀、厨近くには藤、小米花、友待の空には八重の櫻も咲いた。中門から古風な奥庭へ入ると、椎垣に添つて冬青やゆづり葉が繁り、菩提樹や楓、茶室の隔ての袖垣、幾つかの大きい石、厠近くには一本の櫨が秋は深い夕日に照り輝き、裏には柿の枯枝が冬は黒い蒂をこびりつかしてゐた。石井氏は明治天皇の臨御になつた三條公の邸宅を買つて白鬚橋畔に之を奉安し、自もまた傍に住んだが、この家の後ろ横にも、その土藏を移した。この土藏が雜誌『近代風景』の編輯室となつた。

此處の生活は約一年間であつたが、朝夕の墓地の逍遙は、わたくしをして却つて明るい樂しいものに心身を悦ばせた。ただ煤煙の深いのには陰欝にされた。

詩集『海豹と雲』の中の第六章「珠數工の夜」の中の十六篇が、此の『天王寺墓畔吟』と照應する。詩文には、「谷中の秋」「白秋の墓」「庭を眺めて」「白く耀くもの」がある。之等は『白秋全集』の※「詩文集第二」に收めてある。

馬込緑ヶ丘

この近代的風景は、『白秋全集』※の詩文「緑ヶ丘風景」「緑ヶ丘の秋」「緑ヶ丘にて」「剥製の栗鼠」等に委曲が盡されてゐる。

「この緑ヶ丘は赤と緑と青の屋根の、種々雜多な建築様式の所謂文化住宅の波濤の中に突出した一つの岬である。」

曾つて、芥川龍之介君が、仰いで「これは白秋城」だと言つたこの家は、ヒマラヤ杉をあしらつて赤い瓦の屋根を尖らしてゐた。急坂に添つた石垣の上の芝土手（築地と歌には言つたが、日本風のそれではなく、洋風の芝の土手である。）を鍵の手に曲ると質素な丸木の門があり、通草が絡み、また芝土手と上の生垣が續いた。この家は或る建築師が自分の住居として設計したものであつた。簡素で贅が無く、しかも明朗で、如何にもその頭腦のよさを思はせた。庭の芝生や立木や、盆地を隔てた向うの丘、方々の丘の赤松、霧と燈火の九十九谷その他は、歌にある通りである。

その丘の、後ろが切通しになり、蒲田から大井へ通ずる貨物線が敷かれた。洗足池方面へ向ふ途次の陸橋からは、南に富士が仰がれた。そのあたりにも異人館の三四が竝んでゐた。

その昭和二年暮春から翌三年の初夏に至るわたくしの生活は谷中時代とは全く相違した環境が至極快適であつた。わたくしは主とし

て洋風の生活をし、支那服を着け、或は仕事着の豊かなガウンを着けた。芝生へはトラピスト製の素木のサボウをつつかけて下りた。風景も東洋の水墨でなく、清新な油畫のタツチであつた。歌の上の色彩も之に關連しない筈はない。ただ和室は二階に一間しかなかつた。その家に、夜ふけて月に開く窓は閑かであつた。その時折は坐つて古きを温むるわたくしであつた。

詩としては、『海豹と雲』に收めた「月光の谿」の中の「緑ヶ丘夜景」等の七八篇、「童話と月」の中の「月と美童」がある。此の『緑ヶ丘新唱』と流通する。

世田ヶ谷若林

馬込から越したのは、子供たちの成城への通學の便宜を思つたからである。昭和三年初夏のことであつた。その家は赤瓦の洋館で、ポーチの上には郁子の棚が日陰を作つてゐた。邸内は廣く、離家は數寄な和風であり、石の多い幽雅な奥庭もあつた。築山の小さな祠や鳥居、赤松や木※、楓、柏槇、箱根笹、つくばひのそばの土賊、春日燈籠、通草の棚、すべて歌にある。中の生垣を隔てて、廣い芝生があり、周邊には四阿屋、竹に萬古燒の狸、鞦韆」」。櫻、楓、椎、梧桐等の立木。此の集の※畫にある庚申薔薇の中門には眞萩や山吹がしだれかかり、その中門から門庭へ出入りができ、そこにはまた木※の植込があり、應接室の窓には八つ手や松ヶ枝が透かして見えた。自動車小舍は空になつて、二階には或る巡査の家族が住つてゐた。裏手には葡萄棚や壞れかけの鷄舍があり、井戸があり、金魚の池があり、白鷺鳥があさり、また山茶花や椿が咲き、小さな畠には柿が落葉し、食用菊が霜に痛んだ。

書齋は郁子の棚上の表の階上にあつたが、秋は鍵の手の壁から蔦紅葉が實に明るく反射した。電線や所在の巨きい木立や、淨水池の白塔が見えた。

かう書いてくると、當時のわたくしの生活は極めて豪奢なやうであるが、その家は鄉里の先輩で貴族院議員であつた吉原正隆氏の死後の邸宅を、留守番代りに頼まれて、廉く借りてゐたのである。巡査氏は居附の管理人として遺してあつたのである。わたくしは容易く誤解される者の苦痛をしばしば味つたが、その爲に善良で貧しいその一家族との邸内同居を斷る心にはなれなかつた。

風塵のはげしさは非常であつた。三軒茶屋から登戸への街道に面し、牛車、タンク、砲車隊等の轟音、囂音、火山灰の旋風は堪へがたかつた。近くには陸軍の自動車學校もあつた。鑑樓市で有名な世田ヶ谷の本場であつた。此處での生活は六年の初夏まで續いた。

詩文には「新居より」「殲くして長久なるもの」がある。『白秋全集』※。

砧村

今も、わたくしは、この砧村の大藏の西山野にゐる。移つたのは六年の初夏である。此處に來てこの風景を散文に書いたことは曾つて無い。すべてを歌に托した。作歌にしみじみとうち溶つたのもこの砧村である。日常が作家生活であつたため、改めて新作を增補することも尠い。往時を追想して藝術表現に歌材を索る要も亦尠く、直に觀て朝夕に磨いた。

この家は簡素で風致があり、和にして洋、何か虔ましくて、まことに田園の住居と思へる。庭は狭いが、ささやかでも芝生があり、

掌ほどでも苺の畝があり、花壇もある。古木の梅、樗の若木、藤の棚、檜葉垣の向ふは植木屋の植込があり、坐ながらにして南の空に雲の去來が仰がれ、野の涯、夜の星座までが廣々と眼界にはひつて來る。門傍の薄、萩、茶の木垣の横の電柱、白木槿、或は左の書齋の前の山茶花、躑躅、沈丁、月桂樹、小さな祠。門前の道路、畠、田川、狭い田の竝び、萱原、色とりどりの畑の向うには竹山に高槻。東南には本村の火の見、ラヂオ研究所の對の無線塔。このあたりの盆地景情は、四時、わたくしをいかばかり樂しましてくれることか。

わたくしは本來光明の子であらうか。かうした自然の光耀の直下には、如何なる人生の悲痛も一瞬にして忘れ得る性情が抑もの本質であるらしい。自然と一枚になる時こそわたくしの最高の歡びを自身に忝しとする。（昭和九年四月八日、釋迦佛誕日の夜記）

青空文庫情報

底本：「白南風」アルス
　　1934（昭和9）年4月20日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※「木※」と「木榊」、「竹煮草」と「竹※ぐさ」の混在は、底本通りです。
※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。
※「中垣（世田ヶ谷時代）」の素描画は山本鼎（1882年10月24日～1946年10月8日）作です。
入力：岡村和彦
校正：光森裕樹
2014年12月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白南風

北原白秋

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/